

---

# 窓

槍手 持手男

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
窓

【Nコード】  
N4578D

【作者名】  
槍手 持手男

【あらすじ】  
「狭い狭い部屋、狭い狭い心に縛られていた僕とボクが窓を通して出会う時、僕とボクは大きく変わって行く。」二人の少年の純粋な出会いが生む、成長と変化をテーマにしたヒューマンドラマ。似た者同士の二人が自分の将来に下す、それぞれの答えとは。

## 1：ボクの窓

5畳半。

それはボクの世界の広さだった。

ボクの部屋、それが今のボクの世界の全て。

とはいっても、それは物理的な広さの話。

ボクは、この5畳半の部屋からいつも広い広い世界へとトリップしているんだ。

え？どうやってだって？

ふふ、それは簡単だよ、パソコンを起動して、インターネットに接続するだけ。

ボクはこの5畳半の世界からこの世界の出来事のあらゆることを知る事ができる。

パソコンはいわゆる万能な窓。

そして、この5畳半の部屋はボクの船。

ボクはこの船からは出ない事になっているんだ。色々と怖い事が沢山あるのを知ってしまったからね。

そういうものは関わらないのが一番さ。

ボクはパソコンの画面に映るニュースを見ながらふつと溜息をついた。

そして軽い尿意を感じて立ち上がる。

ボクの船はトイレがないのだけは本当に不便だな…。

ボクは薄暗い部屋のドアに近づいた。外界へ出るために。あまり開けたくないそのドアの鍵をゆっくりと開ける。

ドアは軽い音を立てて少しだけ開いた。

ボクは恐る恐る廊下を見渡した。

誰もいないー。

今は夜中の2時。

あいつらは寝ているらしい。

ボクは堂々と扉を開けて数メートル離れたトイレへと旅立った。

用をたして、ボクはそのまま船に帰ってきた。

邪魔者に会う事もなくボクの短い旅路が一つ終わった。

無事生還。

そしてまたこの船の窓の前に腰掛ける。

画面にはさっきまで開いていたニュースの記事が映っていた。  
見出しは「15歳少年、一家惨殺。」

…つまらない。

ボクはそう思って、いつも見ている18禁サイトへとトリップしようとした。

画面を変えるためにパソコンが少しうなる。

早く変われ…。

ボクはうずうずと体が火照り始めるのを感じながら画面が変わるのを待った。

…？

でも変だった。

いつもは数秒で変わるのに、まだ画面は切り替わらない。パソコンの画面上には相変わらずの一家惨殺の記事が映ってる。

ボクはしたうちをして、いらだち始めた。

## 2：消えた窓

ウィーン…

いらだつボクを尻目にパソコンは、ひたすらうなっていた。

我慢が仕切れなくなって、むやみにマウスをクリックしてみる。

でも、無駄にクリック音が暗闇に消えて行くだけだった。

フリーズ。

ボクはまたしたうちをした。

最近、ボクの船のこの窓は調子が悪い。

キーボードを叩いても、パソコンは怪しい光をボクの顔に当てるだけだった。

相変わらず、画面は「一家惨殺」の記事を表示していた。

ボクは胸くそが悪くなった。

ボクはいらだってパソコンの主電源を長く押す。

すると、ボクのパソコンは鈍くうなりながら眠りについた。

ーこのおんぼろが…！

せっかく、毎夜の楽しみを行おうとしていたボクだけれど、そのパソコンの不具合によってすっかり機嫌を損ねたボクは、そのままパソコンの前をたった。勢い良く5畳半の隅に置かれたベッドに倒れ込む。

そして、自然と天井に貼られたボクの天使、グラビアアイドルのまり子ちゃんと目が合う。

そのポスターの中は、永遠に夏。

まり子ちゃんは、セクシーな水着姿でボクを挑発するように見ている。

溜息。

外そうかな…、あのポスター…。

ボクはそんなことをぼんやりと考えながら、気付けば深い眠りについていた。

…。

ボクは目が覚めた。

暗い部屋に、カーテン越しにほんの少し光が差し込んでいる。

恐らく、昼だろう。

ボクは、重い体をゆっくりと起こした。

そして、慣れた手つきで、ボクのパソコンの主電源を軽く押す。

…あれ？

ボクはちゃんと押せなかったのかと、再びパソコンの主電源を押した。

―電源がつく事はなかった。

ボクはあわててコンセントを見てみた。

―入っている。

主電源を押すが、つかない…。

―停電か？

試しに部屋の電気を付けたら、すぐに付いた。

ボクは一気に血の気が引いて行った。

すぎる様に何度もパソコンの主電源を強く押してみる。

―何も変化はない。

本体を叩いてみる。

―変化はない。

…。

ボクは啞然としてそこに立ち尽くした。

壊れたのだ。

ボクの船の唯一の窓が。

### 3：窓の外

どうしよう…。

ボクは啞然となって壊れてしまった「窓」を見つめた。  
それはもはや窓ではなく、ただのガラクタだった。

窓がなくなってしまった事が現実味を帯びてくると、ボクは急に孤独を感じた。

ボクにとっての世界が一気にこの五畳半だけになってしまったのだ。

心臓が無駄に早くなっていた。

落ち着こう…、落ち着こう…。

ボクはそう思ってボクの部屋の窓に近寄ってカーテンを開けた。

ボクの部屋の窓は、マンションの内部にある箱庭に面している。

箱庭といっても、背の高いマンションの壁のせいで光は差し込まず、そこは日夜陰気な雰囲気漂っていた。

ボクの部屋は五階。

この窓からは周りの家の窓ぐらいしか視界に入らないし、ボクはこの窓からの景色が嫌いだった。

外の空気が吸いたい。

久しぶりに窓を開ける。

少し肌寒いが、心地よい空気が流れ込んできた。

それは、長い間忘れていた空気の味だった。

この空気は、色んな所を旅して、今ボクの前に来ているのだろうか…。

ふとそんな考えが頭をよぎった。

この空気は今ボクの前にいるけれど、恐らく、このマンションの外から…、町も越えて、海も越えて、遠くから旅をしてきたのだろう…。

ボクが知らない事も、見たくない事も全て見て感じ取って、その間を流れてきたんだろうか。

ボクは窓から手を伸ばしてみた。

ボクの手は、今、ボクの5畳半の世界の外にある、そう思うと、その手が果てしなく自由な存在に思えた。

…。

その時だった。

ボクは背筋に冷たい物を感じた。

僕の隣人なんだろうか…、僕から見て左側にある小さい窓に人影がうつっていた。

…黒い人影。

でも、その目は確実にこつちを見ていた、射る様に…。

…見てはいけない…。

でもボクの目は導かれる様に、ソレと目をあわせていた。

少年。15歳ぐらい…だろうか。

無表情でガラス越しにボクを見つめていた。

無表情…、でもその瞳には色んなものが映っていた。

ゾクッ…。

一気に背筋に悪寒が走った。

それは無意識なのだろうか。

ボクの頭は警告をならしていた。

見たくない…！！

ボクは金縛りが溶けた様に、カーテンを閉めた。

カーテンの奥の開けっ放しの窓から冷たい風が入ってくる。

静かな部屋の中で自分の鼓動だけが無駄に大きく聞こえた。

さっきまではあんなに涼しく気持ち良かった風も、今は気味が悪い以外のなんでもない。

でも、ボクは窓に近寄りたくなかった。

また…、あの少年を見てしまえば…、いや…、もう見たくはなかった。

あんな恐ろしい目は。

#### 4：スグルの窓

僕はスグル。

何のためにこんな名前がつけられたんだろうか…。

両親は長子だった僕にそれはもうありったけの希望と夢を抱いてこの名前を付けたんだと思う。

大嫌いな名前だ。

何がスグルだ…。

僕は、収まらない興奮で拳を壁に殴りつけた。

拳はさっきの騒ぎで既に血がにじんでいた。

デコボコの穴だらけの壁に新しい凹凸が出来る。僕の血と一緒に。

僕はその壁を背にして床に座り込んだ。

「あははっ…、あははっ…あはっ…！」

なんだかとてもおかしいのに、目からは涙が出ていた。  
おかしい涙が止まらない。

僕の家で静かに笑い声が響いた。

誰も僕がこの部屋で一人泣いてる何て思わないだろう。

―傑作だ。

そう思うと、もっと笑えた。  
もっと泣けた。

「スグルちゃん、スグルちゃん。いい子ね、あなたはとってもいい子ね。」

「スグル、お前は父さんと母さんの誇りだよ。」

「スグル、どうしてできないの!？」

「御前はなんて馬鹿なんだ!？なんでこんなことがわからないんだ!？」

思えば…、そう言われ続けてきた。

過剰に甘い言葉に、それを裏切ったときの「何故」「どうして」。

親の思う通りであれば僕はいい子だった。

親の思う通りでない所は一切認められなかった。

いつしか、親の期待に応える事が僕にとっての生き甲斐になっていた。

正確にいうなら、平穩を求めるには、親の期待を裏ぎら無い事が僕に常に要求されていた。

でも僕はそんなに器用じゃない。

スーパマンでも、天才でもなんでもない。

「何故お前はそうなんだ？どうしてわからない？なんでだ？お前が努力しないからじゃないのか？お前はもっと出来るだろ？どうして？何故？」

…沢山だった。

何か弾けた。

僕の中で何かが弾けたんだ。

…それで出来上がったのが僕。なれ損ない。

僕にもなれない。

親の期待通りにもなれない。

意味の無い存在。カス…。

何のために生きているんだろう。

僕が手首を切り落とせば、両親も僕の苦痛をわかってくれるだろうか。

謝ってくれるだろうか、認めてくれるだろうか…、僕を壊してしまった事を。

でもそんなことをする勇気も僕には無かったけれど。

僕は床に寝そべっていた。

気付けば、窓からは青い光が入っていた。

眠ってしまっていたようだ。

床に転がっている卓上ライトを付けると、僕の部屋が暗闇に姿を表

した。

ボコボコの所々血のついた壁。

散乱した家具、ゴミ。

切り刻まれたベッド、学校の制服。

カッターで何度も斬りつけたフローリングの床。

全部自分でしたこと。

冷静になってみると、ふと、後悔とエスカレートして行く自分に対する恐怖が浮かぶ。

でもそれらの念はすぐに、何とも言えないどす黒い憎悪と、一種の歪んだ誇りにぬぐい去られる。

「ざまあ、見る。」

僕は誰にともなく呟いた。

ぼろぼろの部屋。

僕は付けていた卓上ライトの電気をけした。

すると、すぐに部屋はカーテン越しに窓から差し込む青白い夜の光に彩られる。

静かで、冷静で、孤高で、僕はその光が好きだった。

昼の自分の乾いた血のついてる手で、僕はぼろぼろに所々切られているカーテンに手を伸ばした。

そして、そっと、出来るだけ静かにカーテンを開ける。顔をのぞかせるのは、小さな窓。

もしも、この部屋に付いていたのが、こんな小さな窓ではなくて、大きなベランダだったら、僕は既にこの世にいなかっただろう。

僕はふつと笑って、ガラス越しの景色を見た。

景色といっても、この窓から見えるのは、マンションの汚れた灰色の壁と、このマンションの一部の住人の窓だけ。

でも、僕にとってはそれだけで充分だった。

それらの窓に明かりが付いたりするだけで、僕は一人ではないことを悟る。

だからこの景色は僕にとって充分だった。

僕は色々知っていた。

僕の視覚の左がわにある窓には、レースのカーテンがついている。

ここには僕よりも少し年上の大学生の女の子の人が住んでる。

親がいない日に彼氏を連れ込んできたのも、窓が開いてて会話でわかった。

いつも夜10時になると、寝てしまうようだった。

そのぶん朝が早いみたいだけど。

健康的な人だ。

僕と同じ階に住んでいる反対側の窓の住人は、夫婦だ。

一度、夜中に激しいけんかをしていたのが見えた。

今は円満らしい。

そして右側の窓の住人は、一度も見た事が無い。

カーテンが開いている事も今まで見た事が無い。

ただ、いつも夜中遅い時間まで薄暗い光が付いている。

その光が消える時間は不規則で、ただ正確なことは、毎日、必ず夜中に光がとまっている事だ。

暗くて青白い気味の悪い光が。

とはいっても、僕はその右の隣人の不気味な窓の光が、どの窓の光よりも一番好きだった。

僕と同じ様に夜の静けさを誰よりも知っているのであるう、常に夜中起きている謎の隣人…、

その謎の隣人は僕にとってその窓の光そのものだった。  
ぼんやりとしていて、何故か悲しい、窓の光。

しかし今日はついていない。いつもならついている時間帯であるのに…。

…不在なんだろうか…。

そう思うと、悲しい孤独が僕の心を蝕み始めた。

その夜、僕は何も考えずにただひたすらガラス越しにその窓を見つめていた…。

静かな静かな静寂の中で。

## 5：隣の窓の隣人

気付けばもう昼ぐらいだろうか。

僕は、ずっと何も食わず、何も飲まず、同じ窓際の体勢のまま、一日の大半を過ごしてしまったらしかった。

何もする気がおきない。

ぼろぼろの部屋に、狂っている時計のハリの空っぽの音が響いていた。

僕はゆっくりと時計を見る。

時計の盤面は割れていて、長い針は変な方向に折れ曲がっている。壊れてしまった時間。僕の人生みたいだ。

ガララ…

僕は、異質な音に窓の外をみた。

びっくりした。心臓がバクバクとなり始めた。

開いているのだ…！！

あの謎の隣人の窓が開いているのだ。

よく隣人は見えなかった。

でも次の瞬間、窓の隙間からよつと手が出てきた。

その手は握ったり開いたりを繰り返していた。

何をやってるんだろうー？

僕はただひたすら見つめ続けた。

そして、僕たちは目があった。

それは初めて見る謎の隣人の姿…。

悲しい瞳。

次の瞬間、隣人はすごい勢いで部屋の中に隠れてカーテンを閉めてしまった。

僕は啞然としてカーテンの開いていたその窓を見つめていた。

信じられない…。

心臓がばくばくしている。

でも僕は初めてこの目でみたのだ。

僕と同じく夜の静けさに魅せられたあの隣人を。

僕はドキドキする心臓を感じながら思わず部屋の真ん中に立ち上がった。

嬉しかった。

心が躍るようだった。

それは、今までの謎だったから。

幾晩も幾晩もずっとあの部屋から漏れる切ない光を見ながら、その隣人の顔を思い描いた。

顔のない隣人、僕と同じく夜に淡く儚く、切なく光る隣人。

その隣人の顔を知った。

それは僕にとってこの上ない喜びだった。

予想してなかったその刺激に、驚きと、混乱と、まだ消えない臨場感が僕の心臓を心地よく動かした。  
僕は、喜びに溢れていた。

思わず、部屋を出る。

聞いてほしかった、このたわいもない発見を。

部屋を出て居間のドアを開ける。

居間は静かで、昼の優しいオレンジ色の光が部屋を黄色に染めていた。

昨日の僕が起こした騒ぎは嘘のように、割れた食器や、花瓶が綺麗に片付けられていた。

実に平和で優しい時間が流れている様で、僕の心は相変わらず弾んでいた。

居間を歩いていくと、僕はソファごしに母さんの背中を見つけた。

ー 母さん

聞いてほしかった。僕のこのたわいもない感動を。

でも僕の喉からはそのひと言は出てこなかった。

小さな背中を見ながら、僕の中にまた黒くどす黒い思いが溢れ始めていた。

それはゆっくりと、理不尽な苛立に変わっていく。

すると、母さんがゆっくりと振り返った。

やつれた様な顔。

くぼんだ目。

その目は僕を見据えると、少しばかりおびえた様な光を帯びた。  
でもそれは母さんの疲れた笑顔にすぐに瞳の奥に消えてしまったよ  
うだったけれど。

「あ…、スグル…、どうかしたの…?? お腹でも空いた…?…何か  
…作りますようか?」

おどおどした様子。

困っているのだろうか、よそよそしささえ感じられる様な口調。

―弾けた。

僕の苛立は頂点に達した。

僕の心はどす黒い暗闇に支配された。

「…うるせえんだよっ!!!  
このクソばあが…!!!!!!  
俺に気安く話しかけんじゃねえぞ、コラア!!」

僕はそう怒鳴り散らすと、興奮している状態で、目の前のソファ―  
をおもむろに蹴ってみた。

母さんは啞然としたように目を見開いて僕を見つめていた。

絶望―。

僕はぼそぼそと一人で荒っぽく母親を罵りながら自分の部屋へと帰  
って行った。

自室のドアを力任せに閉める。

家に乱暴なドアのしまる音が響いた。

同時に僕の興奮は次第に下がって行った。  
そしてソレは僕に絶望と後悔をもたらす。

あんなことが言いたくて母さんに近寄ったわけじゃない…。

僕は力なくその場に座り込んだ。

情けなかった。

母さんの目に映し出された絶望を思い出す。  
暗くておびえた様な瞳。

苦しかった。

憎くて憎くて申し訳なくて申し訳なくて。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

憎い憎い憎い憎い憎い……！！！！！！！！！！

憎しみが僕の心をその鋭い爪で何度も引っ搔いているかのようだった。

もっと憎め、もっと憎め、と。

自分を壊したあの女を憎め、と。

もっともっとあの女に絶望をこの手であたえてやれ、と。

あの女はそれに代償する傷を自分につけたのだから、と。

母親が憎かった。

父親も憎かった。

彼らの前に出ると、抑えきれないほどの憎しみの波がどつと押し寄せた。

でも、その度に憎しみに支配され、追いやられ、殺されていく僕の心が断末魔を上げながら、こう叫ぶ。

ごめんなさい、ごめんなさいー、と。

僕は力なくその場から立ち上がると、窓際の定位置に座り込んだ。

ー右隣の隣人の窓は固く閉まっていた。

僕はなんだかソレが無償に悲しく感じられた。

## 6：窓の挨拶

僕が「彼」、右の窓の隣人に再度あったのは、僕が彼を初めて見てから1週間ぐらいたった時だった。

隣人は、あの初めて会った日以来、夜中に淡い光を発さなくなった。あの日から何が変わってしまったのかは解らなかったけれど、彼の窓は、この一週間夜はずっと暗かった。

僕は「彼」にあうまでは、「彼」はそれなりに年のいつている人間だと思ってた。

仕事か何かで夜に電気を付けているのだろう、と。

でも、僕の予想はちよつと違っていたようだった。

だって、僕が見たのは、年齢不詳の男。

一瞬しか見れなかったため、僕の頭の中では彼の顔はモザイクがかったが、彼の瞳だけは覚えている。

少し悲しそうなあの瞳。

でも、ソレ以外のことは覚えていない。

彼が少年だったのか、青年だったのか、中年だったのか、熟年だったのか。

どれでも当てはまっていまいそうだし、どれも違いそうに思えた。もしかしたら、男というのは勝手に思い込んでいるだけで女かもしれない。

僕はこの一週間、ひたすらその隣人の事ばかりを考えていた。

それ以外僕がこの一週間やったことは、母さんが持ってくる食事を食べて、そしてまた窓際で空想して、お腹が空いては何かを食べて、窓際に座って、眠くなったら寝る、そして起きてしまったら、また窓際に座っての繰り返し。

やる事もないし、むしろ何もやる気が起きない。

まあ僕にとってはいつも通りの何の変哲もない日常を送っていたという事だ。

でも神様は僕のそんな無駄に消費されて行く毎日を許してはくれなかったようだ。

僕の狭い世界に彼をはめ込んだのだから。

そして、その出会いは予期していなかった夕方に起きた。

窓越しの僕の目の前で、何の予告も無しにカーテンが開く。

僕らは今回は目がすぐにあった。

僕はそこで初めて隣人の顔を「少年の顔」として認識した。

年はよくわからなかった。

僕とよりもすこし幼さの残る顔。

彼は少しまたびっくりしたようだったけど、今回は彼は逃げ出さなかった。

隣人は僕に気がつくと、何か妙にすっきりとした顔つきでペコリと一礼した。

僕も慌てて一礼する。

久しぶりの他者とのコミュニケーションに僕の心臓が活発に動き始めた。

でも、その一礼の後、隣人の視線はすぐに僕から離された。

ー彼が窓際から去ってしまふ…！

僕はそう思うと、拳を握りしめた。

ドンッ！

僕は自分でも意識していないうちに自分の窓を力強く叩いていた。それに引き寄せられる様に、隣人の視線がまた僕にむけられる。

僕は自分のした行為に戸惑った。

でも、無性に彼を引き止めたかった。

そして、それは成功したのだ。

僕はドキドキした。

今までにない体験。

窓越しに名も知らぬ隣人を引き止めるなんて。

僕はがむしゃらに窓越しのジェスチャーで「待って」と彼に訴えかけた。

彼はそのジェスチャーを理解したのか、少し不可解そうに僕を見つめる。

僕は焦った。

行かないでほしかった。

僕は今まで止まっていた思考を巡らせながら、必死に隣に散らばっていた学校のプリントと、床のマーカールを引き寄せるた。そのプリントの裏に文字を書いて、隣人にそれを見せる。

しばし、彼はその紙を見つめた。

僕の息は荒くて、僕の手は緊張と期待で震えていた。頭の中が真っ白だった。

彼は困るだろうか…。

そんな心配も浮かんだけれど、彼は無表情で、「どこで？」とでも言う様に、自分が立っている窓際を指さした。

僕がプリントを両手で握りながら、強く頷くと、彼はちょっとだけ困惑した様にその場に座った。

僕は思いがけない事にうれしくて、嬉しくて、『ぼくと話を少ししてくれませんか？』と荒々しく書かれた学校のプリントを強く握りしめた。

そして、思わず、周りに数枚散らばっていた学校のプリントを集め寄せる。

自分でも僕は自分の行動に驚いていた。  
予想外の展開に胸が高鳴る。

自分が言い出してしまった事だ、自分から会話を始めなくては、と僕は紙にマーカーをのせる。

…何を書けばいいんだろう…。  
知らない人と話すときは…。  
あ、そうだ、名前だ…。

僕は紙に大きく書いた。

『ぼくはスグル。  
君は？』

そしてそれを彼に向ける。  
隣人はそれを読むと、先ほどのボクと同じ様に『待つて』のジェスチャーをした。

そして、窓辺から立ち上がって、僕の視界から消えてしまった。

僕の手は震えていた。

行ってしまったのだろうか…？

でも僕の心配をよそに彼はすぐにかえってきた。  
手に紙とペンを持って。

隣人は、窓辺に座り込んで、何やら紙に書き始めた。

『橘』

橘、たちばなと読むのだろうか、恐らく苗字を書いたらしかった隣人は、僕を見つめた。

僕は会話を止めない様に次の紙に手を伸ばす。

『橘くん』

僕はそこまで書いて手をとめた。  
どうしよう…。

何て書けばいいのか解らなかった。  
僕はちらりと「橘くん」を見た。

少年だ。

僕を無表情に見つめている。

『中学生？』

僕はそう書いてかれに見せた。  
彼は首を横に振ると、

『高校生』

と書いて、それから僕を指さした。

僕は自分で自分を指さした。

そして、思わず口で「僕？」と言ってしまふ。

僕は紙に書いた。

『19才 学校行つてない』

彼にそれを見せると、橘君は驚いた様子に何かを書き出した。

『高校生と思つてた』

僕は童顔、おまけに最近是不規則な生活でやせこけていたから、貧弱に見える。

今の僕は恐らく、高校生に見えるだけでしたが、と僕は思った。

『学校帰り?』

僕は何気なく聞いた。

すると、彼は下を見て少しこう書いた。

『学校いつてない』

僕は彼を見つめた。

その瞬間、まだ二言ぐらいしか言葉を交えてない彼の気持ちも、生い立ちもなんだか理解してしまった様な錯覚に陥った。数年前の自分を見てるようだった。

『行かなくていいよ』

僕は思わず書いてた。

『ぼくもずっと長いことってないから』

すると、橘君は少し笑った。寂しそうに、静かに笑った。それは初めてみる彼の笑顔。

『ぼくら　もしかして似た者同士？』

僕は書いた。

橘君はまた静かに静かにに笑った。

## 7：窓越しの質問

僕の予想は的中。

僕も不登校、彼も不登校。  
お互い似た者同士だった。

そんな僕らが出会ってしまった。  
滑稽な滑稽な出会い方、窓越しに出会った隣人同士。

もう夜だった。

夕方初めてであつた僕らは、質問をどっちかがしては、お互いそれに答えると言つた形式で細々と奇妙な筆談を続け、夜を迎えていた。でも、彼も僕もまだ紙とペンを手にお互いの顔を小さい窓越しにちらちらと見ていた。

今まで橘くんのことと解つた事は、

- ・ 兄弟はいない

- ・ B型

- ・ 趣味はインターネット、まんが、アイドルのまり子ちゃん

ということぐらいだった。

そして、橘くんにもそれと同じだけの僕の情報、  
名前はスグル、

- ・ 兄弟はいない

- ・ A B型

・趣味は特にないが渡っていた。

僕はそれだけの情報をやり取りするのに既に大量の紙を消費していて、僕の隣には使用積みの学校のプリントが積まれていた。今度は何を聞こうかと僕が迷っていると、橘君に先を越された。

『ジャマなものって、どうするべき？』

僕はそう聞かれて少し考えた。

邪魔な物…。

僕の脳裏に色々な事が浮かんた。

色々な物や人が次々浮かんできて、僕の人生は邪魔に溢れている様な気がした。

むしろ、自分という存在が邪魔な気さえする。

周りにとっても、僕自身にとっても。

なんてジレンマだ。

僕は橘君の質問になんとか答えられなかった。

全てが邪魔すぎて、それをどうする事にもできない自分がいる。

ただ、それらを邪魔だと感じて、苛立って、一人自滅してしまった自分。

だからそんな僕には橘君の質問は難易度が高すぎた。

しばしの沈黙の後、僕はひと言だけこう書いた。

『わからない』と。

橘君はそれを見ると、ふっと悲しそうに笑った。

『そっか』

と彼は書いた。

『もう寝ていいかな』

彼はそう書いた。

最近、電気が夜にずっと付いてなかったのは、規則的に寝ていたせいなのか、彼は眠そうにあくびをした。

僕はというと、常に不規則で、今の時間はいつも起きているから眠くはなかった。

でも、相手が眠くては仕方がない。

僕は少し残念に思いながら頷いた。

『明日も、ぼくと話をしてくれる？』

僕はそう書き終えてから手を止めた。

そんなことを書いたら…、うざったく思われるだろうか…。

そんな思いが僕の頭をよぎった。

嫌われたくはなかった。

今日出会った友達…、友達と言っているのかもしれないけど…、僕は彼と話し足りなかった。

でも、何故か、その文章を書いた紙を彼に見せるのを躊躇している自分がいた。

俯いている僕は、橘君が窓をコンコンと叩く音で顔を上げた。

『おやすみ また 明日』

橘君は少し照れた様にそう書かれた紙を僕に向けていた。

嬉しかった。

僕は強く強く頷いた。

そうすると、橘君は寂しそうな顔つきでカーテンを閉めた。

僕も自分のカーテンを閉める。

なんか疲れた…。

僕は今までにない疲労感を感じていたけれど、なんだかすごく満たされていた。

横にある、使用済みの紙の束を見ると、その満足感が増してきた。

明日も会えるかと思うと、心が躍るようだった。

僕はそのまま電気を消して、ベッドに寝転がった。

青白い夜の光が差し込む部屋で唯一傷の付いていない、天井を見つめながら考えた。

橘君のことを。

そして、その思考の対象は次第に彼の最後の質問に対する答えへと移って行く。

『ジャマなものって、どうするべき？』

邪魔な物…。

僕は真っ先に家族が頭に浮かんだ。

今は僕に毎日食べ物を運んでくるだけの母親。

自分が産み落としたくせに、僕を見るたびにおどおどと怯える愚かな母親。

僕が出来損ないだと知ると、さじを投げたのか、僕に干渉する事を一切やめた父親。

無責任で、薄情で、僕を壊した奴らー。

コンコン…

僕は苛立って音のする方、部屋のドアを睨みつけた。

「スグル、大丈夫…？」

夕飯手付けてないのね…。大丈夫？

具合でも悪いの…？」

母親はいつも料理を僕の部屋の前に、ある一定の時間になると置いている。

僕はその時間になると、母親がドアの前からいなくなったのを確認してから料理を部屋に入れて、食べ終わったら出前の様に皿だけ部屋の外に出していた。

でも、今日は橘君との話し合いですっかり夕飯のことを忘れていた。そう言えば、橘君もトイレに数回たつた以外は、夕方から僕と付きつきりだったから夕飯を食べていなかった様に僕は思った。

僕は橘君に少し悪く感じた。

彼の家族は彼を夕飯に誘わなかったのだろうか？

それとも、僕みたいに一人でいつも食べているのだろうか？

どちらにしろ、彼は今日夕飯を食べてないのだ。

橘君に少し申し訳ない気持ちだった。

「スグル…？」

ドア越しの母親の声で僕は現実に取り戻された。

僕が珍しく夕飯に手を付けてないから心配しているようだった。

はつきりいつてうざったかった。

僕は食べる必要がなかったから、食べなかったのだ。  
いちいち心配されてはうざったいだけだった。  
そんなことをねたに無駄にあの人と口をききたくもなかった。

夕飯を食べなかったからって、それを口をきく口実にされたくなんてないね…。  
本当にうざったい親だと思った。  
放っておいてほしかった。

僕が何にも答えなかったから観念したのか、母親の足音がドアから遠ざかって行くのが聞こえた。  
僕は溜息を軽くついてまた天井を見つめた。

ほんと、邪魔…。

僕は邪魔っていうものを実感したような気がした。

『ジャマなものって、どうするべき？』

彼の質問が再度脳裏に浮かんた。

どうするべきだ？

僕は今、ひたすらシカトをしたけど、それでは一時的な逃避にしかない。

邪魔なものが無くなったわけじゃない。

邪魔なものは…どうするべきなんだろう…。

無くなってしまうばいいんじゃないの？

ふと、そんな考えが僕の脳裏に浮かんだ。

あの質問を見たときにすぐに浮かんだけど、無意識的にすぐに却下していた考え。

邪魔なものは消えてなくなってしまうばいいという考え。

僕は両親がいなくなったときのことを考えた。

…

僕は確実に死ぬだろう。

今の僕では食事さえまともに用意出来ない。

外に買いに行けないのだから、家の食料が尽きたらおしまいだ。

洗濯だってやり方もわからないし、お金だって何も無い。

僕はそこまで考えて溜息がでた。

本当に邪魔なのは…、僕なんだった。

あの親は…、邪魔なものは、どうするべきだと考えているんだろう…。

僕を…、どうしようと思ってるんだろう…。

僕は考えているうちに、心地よい疲労感に満たされてうとうとと眠りに入ってしまった。

## 8：テレビ越しの彼

目が覚めた。

嘘のようだけど、外の小鳥のさえずりで起きた。

僕は近くに置いていた腕時計を見た。

7時46分。

それが夕方の7時46分で無い事は、カーテン越しに入ってくる光の色を見れば一目瞭然だった。

朝…、らしい。

いつも昼に目を覚ましている僕は、なんだか不思議な気分だった。

何故か自然と僕の足は窓辺へと向かっていた。

カーテンを開けて、隣の窓を見る。

橘君の部屋のカーテンは閉まっていた。

そのかわり、左の部屋のふりふりのカーテンは開いていて、向かいの部屋のカーテンも窓も開いていた。

まるで昨日のことを夢のように感じながら、僕はカーテンを閉めた。ぼーっとしたまま、自分の部屋の鍵を開け、ふらふらとした足取りでトイレへと向かう。

廊下を隔てて、僕の部屋とトイレは近い。

僕はトイレのノブを握って回した。

あかない。

普段、昼に起きてトイレに行っているため、トイレが閉まっているなんてことはそうそうなかった僕は、その「開かない」という現象を理解するのに少し時間がかかった。開かないトイレをぼーっと見ていると、中から水のながれる音がした。

僕の意識が徐々に覚めて行つて、僕はやっと理解した。

それと同時に、無意識的に頭がどこか隠れる場所を探していた。でも、相手がトイレから出てくる方が早かった。

：

長身でやせ形、肌は浅黒く、頬はこけていた。

ぎよつと出ている目は僕をとらえると、驚いた様にしばし固まっていた。

それは、ここ数週間顔を合わせていない、父親だった。

僕は、成長期から不摂生な生活を繰り返していたせいか、父親からは想像出来ない程、身長が低かった。そのうえ、不健康的な痩せ方をしていた。

やせ形で長身な父親でさえ、僕の前では巨人のように思えた。

僕は、無意識的に父親からすぐに目をそらした。

すると、彼は

「おはよう。」

といった。

低くて、大人しい声。

彼のこんなにも冷静な声を、間近で聞いたのはいつぶりだろう。

僕は答えなかった。

正確にはどういう風に答えればいいのかも解らなかった。

笑顔で言うなんて事は考えられなかったし、無表情でぼそつというのなんだか嫌だったし、むしろ答えないのが無難のように思えた。僕が無表情で俯いていると、親父はそのまま居間へ向かった。

僕は顔を上げて、居間へと去って行った親父の背中を見ていた。小さな背中。

親父に会ったのは本当に久しぶりだった。

久々の出来事のためか、それとも、予期していなかった出会いのためか、単なる驚きのためか、僕の心臓はバクバクとしていた。

用を足して水を流そうとしていたときだった。

「へえ、じゃあお隣の橘さん、最近体調でも崩してるのかしらね？」

母親の声。

僕は「橘」という名前に手を止めた。

「最近はずっと寒くなったからそうかもな。」

親父の声が聞こえた。

どうやら母親が父親を玄関まで送り出しにきたらしい。

トイレは玄関のすぐ隣だから二人の声が近くで聞こえた。

僕は息を殺して二人の会話に聞き入った。

「今晚は夕食はいらないのね？」

「ああ。」

でも、どうやら「橘さん」の会話はもう二人の間では終わっていた

ようだった。

たわいもない会話が二人の間で続く。

「じゃあね、寒いからお父さんも気をつけて。いってらっしゃい。」

「行ってくる。」

玄関の開く音。

そして、閉まる音。

僕は母親の居間へと戻って行く足音を確認してからトイレを流した。そして、トイレを出る。

いつもは、起きると、部屋の前に昼食、僕にとっては朝食が置いてあるが、いつも僕が熟睡している今の時間には、何も置いてなかった。

僕は朝食を求めて、居間へと渋々向かった。

居間のドアを開けて入ってきた僕を見ると、母親は僕が起きている事を父親から聞いていたのか驚いた様子もなく、ほんのりと笑って「おはよう。」と言った。

僕は無言で居間の中央にある四角いダイニングテーブルのイスに座った。

そして、そのダイニングテーブルからちょうど良く見える様に配置されたテレビには、ニュース番組が映っていた。

大人気だという「モノ ミンタ」が司会をつとめている朝のニュース番組だった。

画面に『ごっそり、8時をまたいでニュース』と表示されたかと思

うと、モノ ミンタが、大きなボードを引つ張ってきた。

「今日も、『8時をまたいでニュース』のお時間がやってきました。」

モノが独特の口調で語り始める。

「8時をまたいでニュース」のボードにはニュースが羅列されていた。

でも、所々、紙が貼られて、見えなくなっている。

どうやら『8時をまたいでニュース』とは、モノがその紙を剥がしながらニュースを語って行くという形式だった。

僕はたんとと語られて行くニュースをただ見つめていた。

知らない間に色んな事が起きて、僕が部屋から出られずにいる間に確実に世間が動いている事を、僕は実感していた。

僕がそんなニュースをただ黙って見ていると、ふと、僕の目の前に皿が置かれた。

皿には目玉焼きと、ソーセージ、トーストが乗っている。

朝食だ。

今作ったばかりなのだろう、温かくて湯気がたっていた。

母親は何も言わずに、キッチンへ戻ると、今度はコップとオレンジジュースのパックを持ってきて、僕の前に置いた。

僕は思わず、母親の顔を見た。

僕と目があつた母親はふっと笑うと、また何も言わずキッチンへと戻って行った。

僕はフォークを手に取って、ソーセージを口に入れた。

美味しかった。

なんだから、とても美味しかった。

『えゝ、じゃあ次ね。』

モノの声がテレビから聞こえた。

僕は視線をテレビに向ける。

『15歳少年、語った「消したかった…。」あの夜の真相』

モノが紙を剥がしながら語り始める。

『えゝ、この事件は、ちょうど、9日前の事件ですね。都心で一家が惨殺された。』

その一家の長男が捕まって、動機などは一切謎だったのが、どうやら語り始めたらしいですね。』

モノがそういうと、今まで映っていたスタジオがVTRの画像に切り替わった。

真っ黒なスクリーンに白いおどろおどろしい文字と一緒に男の声が流れる。

「消したかった…。」

するとまた画面が切り替わる。

ニュースが放映された日の現場のマンション近くの映像になった。

『コレは今月。日の深夜、起きた事件。都内T区のマンションの一室で一家が惨殺された。』

殺されたのは、Hさん一家。

この事件の犯人であった長男は、惨殺現場となった自宅の自室にて発見され、本人の自白により、すぐ逮捕されたが、今までその動機は不明とされていた。』

すると、また画面が切り替わり、今度は高校生らしきの人物のアゴから下が映し出された。

字幕には「長男の友人」と書かれていた。

『いや、ほんとうに明るい子だったし、ぜんぜん悩みとかも、なさそうで…。』

事件を聞いたときはひたすら信じられなくて…。』

と呟いた。

『長男は、周りからの評判も良く、成績も優秀、優等生として学校では人気者として生活を送っていた。』

とナレーター。

『しかし、家庭での彼は学校での彼と違っていたようだった。』

画面が再度切り替わり、今度は彼の近所のおばさんが出てきた。顔にはモザイクがかかっている。

『なんかよく夜に怒鳴り声が聞こえてた。』

とそのおばさん。

『「ふざけんな」とか「クソばばあ」とか。多分男の子の声。

でも朝会ったときとかは、元気よく挨拶してくれる子だったからねえ。

私はまあ、反抗期なのかな、と軽く思ってたけどねえ。』

『そして昨日彼は語った…』

と、ナレーターの声が流れる。

『消したかった…。

学校での僕も家での僕もどれも僕じゃなかった。

僕じゃない僕を縛り付けてるものも、僕自身も消そうと思った。自分も消そうと思ったけど、怖くて出来なかった。』

と彼の言葉であろうものが字幕つきで流れた。

そこまで流れてから、画面がスタジオに戻った。

モノの敵しそうに歪んだ顔が表れる。

『いやあ〜。』

とモノ。

『今、本当に少年が自分の家族を殺したり、他人を傷つけたりする、そういう事件がおおすぎるねえ。

本当に信じられないねえ。

どうしてこういう風になっちゃうのかねえ。

しかも、この少年は学校では評判がよくて、誰もその悩みとかに気付いてなかったんだからねえ。

いやあ、残忍な事件です。

…、じゃあ、次の事件ね。』

そうすると、モノは次の事件をたんと語り始めた。  
僕は溜息を付いて、テレビから視線をそらした。  
そして、またソーセージをフォークで刺して口に運ぶ。

僕の頭の中には、例の事件の少年の言葉が浮かんでいた。

『学校での僕も家での僕もどれも僕じゃなかった』

僕もそういう風に感じたことがあった。

僕がまだ学校にも行つて、優等生を一生懸命に演じようとしていたときだ。

数年前まで、僕はそうだった。

でも、僕はそれに耐えられなくなった。

そして、今に至る。

あの日々から生まれたのは、惨めで自分勝手に、いらぬ存在の僕。  
でも、死ねずにのうのうと毎日毎日時間を無駄に消費しながら生きている僕。

これが僕だ。

壊れてしまった僕の慣れ果てだ。

彼と僕はもしかしたら似た者同士だったのかもしれない。

顔も名も知らぬ彼も偽りの日々耐えられなかったのだろうか。

でも彼と僕は違う道を選んだ。

彼が選んだ道は殺人鬼になること。

家の中で、自分のからに閉じこもって苦しむのと、人を殺してしまつて牢に入るのでは、どちらが幸せなんだろう…。

消してしまいたい、と思う事もあったけど、彼は本当に消してしま

って幸せだったんだろうか。

とはいっても、僕の今の状態が幸せだなんてみじんも思わないけれど。

でも…

僕は台所で食器を洗っている母親をちらりと見た。  
それから自分の前に置かれた朝食を見る。

…

そして、僕は名も顔も知らない少年に同情した。

## 9：窓越しの食事

僕は満腹なお腹を抱えながら無言で部屋へと帰って行った。

朝からあんなに食べるのはちよつと苦しかったけど、残すのはしてはいけない気がした。

少しドキドキしながら、窓のカーテンを開けた。

橘君の部屋はカーテンが閉まっていた。

思わず溜息をつく。

いつになったらまた橘君に会えるのだろうか…。

そんなことを思いながら、僕は窓辺に座った。

昨日使った紙の束を部屋の隅に綺麗に置いて、まだ未使用の紙を束にして窓辺に置いた。

今日は何を聞こう。

そういえば、昨日の最後の質問の橘君の答えを聞いてなかった。彼も僕と同じくわからないんだろうか。

僕はまるで遠足前の少年のように色々な考えを巡らした。

心は弾んでいて、僕の頭の中で様々なシチュエーションが勝手に展開していた。

僕は待った。

思わず腕時計を引き寄せて時間を見てしまう。

僕は待った。

腕時計を見るが、10分しか経っていない。

僕は待つて、待つて、待つた。

腕時計を見ると、13分経っていた。

僕は苛立つて時計をベッドに投げつけた。

僕は待つた。待つて、待つて、待つた。

.....。

.....。

.....。

.....。

.....グウ.....。

っは。

どうやら眠ってしまったようだった。

僕はあわてて橘君の窓を見たが、相変わらずカーテンは閉まっていた。

「はあ。」

思わず大きな溜息と一緒に声まで出てしまう。

僕は仕方がなく、ベッドに近寄って腕時計を見てみた。

11時38分。

昼だというのに、窓の外は暗かった。

朝は鳥のさえずりが聞こえるほど、あんなにすがすがしい天気だったのに、まるで僕の心情を表しているかの様に外は雲行きが怪しいようだった。

僕は、また窓辺に座り込んだ。

彼を待っているというのも正しいけれど、正確には他にやる事がなかった。

だから余計に期待してしまう。

だから余計に彼に会いたくなってしまう。

また 明日

彼はそう僕に書いてくれた。

それは社交辞令だったのか、それとも彼も僕とまた会いたいと思ってくれたのか、何故彼がそう書いたのかはわからない。

でも、彼は確実にそう書いた。

また 明日、と。

だから僕は待とう。

彼がああ窓から顔を出してくれるまで。

僕は自分の中で腹をくくった。

何も考えずに待とうと。

僕は時間の感覚がわらなくなっていた。

ひたすら待つのは辛かったが、時々、昔買った本などを読み返して、時間をつぶしていた。

特に面白い本は無かったけれど。

どれぐらい時間がたったのか、僕はコンコンという音で視線を本から窓の外へと移した。

思わず顔がにやけてしまった。

橘君だった。

本を無我夢中でベッドの上に投げると、近くに置いていた紙を勢い良くつかみ、ペンで書く。

「こんにちは」

その紙を彼にみせると、彼は笑って唇でゆっくり「こんにちは」と言った。

僕はすかさず次の紙を取って書いた。

「時間ある??」

そして見せる。

すると、今度は橘君がなにやら書いてきた。

「もちろん」

「スグル君と」

「話したくて」

「窓をあけた」

と書いてくれた。

僕は思わず恥ずかしくて嬉しくて俯いてしまった。

にやけて馬鹿みたいな顔になってるだろうから、橘君に見せるのはなんだか恥ずかしかった。

すると、コンコンとまた橘君が窓を叩いて、僕はその音に引き寄せられる様に橘君をみた。

橘君はさっそく

「質問いい？」

とかかれた紙をもっていた。

僕が快く頷くと橘君は続きを書いた。

「人間って」

「食べないと」

「何日で」

「死ぬのかな？」

僕は予想もしてなかった質問に少し驚いたが、橘君らしいと思った。橘君のことについて、ほとんど何も知らない僕だったけど、昨日の橘君の最後の質問の印象が強すぎたのか、橘君はおもしろい質問をする子だと思っていた。

僕は頭をひねって考えた。

そう言えば、随分と昔、まだ学校にいた頃、その頃の友人と人間の生命力についてそんな話をしたような気がした。

僕は脳細胞の全てを使って思い出そうとしていた。

そして精一杯の答えを紙に書く。

「詳しい日数は」

「覚えてない」

「けど」

「けっこう生きれた ハズ」

僕がそう書くと、橘君は例の寂しそうな笑顔で笑った。

「試してみようかな」

と橘君。

僕はぎよっとした。

「死ぬよ!？」

「止めて!」

冗談で書いているのかよく解らない橘君に僕は必死で書いた。

橘君は寂しそうな微笑みで僕の紙を見ていた。

その微笑みがあまりにも悲しそうで、僕はいたたまれなくなった。

「ぼくだって」

と僕は書き始めた。

「死にたくなるけどさ」

「でも」

「いつも 死ねないんだ。」

橘君は驚いた様に僕の書いた文を読んでいた。

「怖いからね。」

と僕は付け加えて笑った。

橘君も僕につられて寂しそうに微笑む。  
すると橘君が何やら書き始めた。

「スグル君は」

「死ぬ運命に」

「ないんだよ。」

僕は橘君から出た言葉に拍子抜けした。  
運命…？

普段あまり考えないその言葉に一瞬思考を巡らす。  
橘君は続けた。

「でもぼくは」

そこまで書いて橘君の手が止まった。

数分間、彼は考え込んでいた。

僕は待った。彼が次の言葉をちゃんと書いてくれるまで。

そして、決まったのか、彼は何やら書き始めた。

「そういう運命にあつた のかも」

彼が選んだ言葉。

よく意味がわからなかったけど、それはなんだか重かった。

運命とか、僕の思考の外に或る言葉を使われて僕は理解出来なかったけど、すかさず書いた。

「まだ わかんないよ」

だって僕は君と会えたから…。

それは何の理由にはならなかったけど、僕は心の中で呟いていた。  
なんだか信じられなかった。

僕が、こんな僕が、誰かを励ましているなんて。

「そんなの 誰にも」

「わかんないよ」

僕は書いた。必死に書いた。

「運命が」

「決めることじゃない」

僕は必死に書いた。

橘君は僕が書いた文字を一字一字読んでくれているようだった。嬉しかったし、笑ってほしかった。

橘君は

「ありがとう」

「そうだね」

と書いた。

僕らはそれからたわいもないことを筆談した。

お互いのこと、部屋のこと、マンションのこと、ちょっと哲学的なこと。

でも、一切過去や未来について話さなかった。家族についても。

気付けば、曇りだった空はいつそう、暗くなっていた。

左側の部屋のふりふりのカーテンも、向かいの夫婦の部屋のカーテンも、気付かぬうちに閉じていた。

僕は、橘君に【ちょっと待って】のジェスチャーをすると、ベッドの傍らに落ちている腕時計を拾った。

8時12分。

もう既に母親が僕の夕飯を部屋の外に置いておいてくれているであ

ろう時間だった。

僕は窓辺に戻って書く。

「夕飯の時間だね」

それを見た橘君は、何も言わなかった。

僕は続けて書く。

「食べてきて」

「いいよ」

僕は昨日橘君を拘束してしまった事を悪く思っていた。

だから、僕は橘くんにも、ちゃんとご飯を食べてほしかった。

橘君は少し複雑そうな瞳で僕の紙を見つめた。それから首を横にふった。

それがどういう意味なのか僕にはよくわからなかった。

「もしかして」

僕は付け加えた。

「まだ」

「ご飯の用意」

「できてない？」

橘君は少し苛立った表情で僕を見つめた。

そんな橘君を見たのは初めてで、焦る僕の心臓がどんどん早まっ

て行った。

悪い事いっちゃったのかな…？

「ごめん」

僕は意味もなく謝った。

橘君は、少し怒った様にペンを取ると、書いた。

「どうして」

「あやまるの」

僕はあわてて返事をする。

「悪い事」

「言ったかと」

「思ったから」

僕はそう書いて橘君を見つめた。

彼は僕をまっすぐに相変わらず苛立の表情を称えて見つめていた。  
何かを書かなくてはと思い、書き加える。

「ぼくは、いつも」

僕はそこまで橘君に見せてから次書く事を躊躇した。

思わず常に自分が一人で食べている事を書こうとしていた自分が恥ずかしかった。

いつも一人を食べている事を、橘君に知られたくない…。でも…。

僕は僕の次の言葉を待って複雑な瞳で見つめる橘君をちらりと一瞥してから、…唾を飲みこんで書いた。

「一人で」

「食べてるんだ」

「よければ」

「一緒に」

「食べてほしい」

僕は必死にそれを橘君に見せた。僕の100%真実な言葉。嘘をつく事はこの窓越しに友人にしたくなかった。すると、それを読んだ橘君の顔は穏やかになっていた。

通じたのかな…。

橘君は強く頷いた。

「今」

「持ってくる」

そういつて橘君は窓辺から消えてしまった。

僕も、橘君が消えている間に部屋のドアへと向かった。鍵をあけて、扉を少しだけ開ける。

いつものところに、食事が置いてあった。小さなメモ付きで。

僕は食事を部屋に入れながらそのメモを開く。

「スグル

昼食手付けてなかったね。

朝早かったからまた寝ちゃったのかと思ったよ。

ちゃんと夕ご飯食べてね。

母」

僕は無表情でそのメモを閉じながら、部屋の鍵を閉めた。

メモを傷ついてぼろぼろの本棚の上に置いて、食事の盆を持って窓辺に座った。

既に橘君が窓辺にいた。

手にはツナ缶をもっていた。

僕は橘君の簡素な夕食に驚きながら近くの紙にかいた。

「いただきます」

橘君も嬉しそうに同じ言葉を書いた紙を見せてくれた。

僕は夜の青白い光に照らされた今日の夕食を見た。

ハンバーグとサラダ。

ポタージュスープ。

まだ温かい。

ハンバーグは、僕の好物だった。

僕は橘君を見つめた。

美味しそうにツナ缶からそのまま食べていた。

ソレ以外の食べ物、僕は見つける事ができない。

僕が見ているのに気付くと、橘君は優しい笑顔を返してきた。

そんな笑顔は初めてで少しびっくりした。

でも、同時に思った。

美味しいのかな、あれ。

僕は自分の食事に手を付けた。

大好きなハンバーグ。

それはいつも一人で食べるより数倍美味しく感じられた。

窓越しの僕と彼の初めての一緒の食事。

## 10・窓越しの約束

食事はあつという間だった。

特に会話は出来なかったけれど、とても充実していた。

僕は、空っぱの食器の上に

「ツナ缶がたべたい」

そう書いたメモをのせて、ドアの外に置いた。

橘君が食べているのを見て無性に僕も食べてみたくなったのだ。

僕は扉を閉めて鍵を閉めた。

そして窓辺へと戻る。

「美味しかった」

そう書いた紙をちらつかせながら橘君は笑った。

あれだけで…？

よっぱど美味しいのかな、ツナ缶。

僕はそう疑問に思いながらも、笑みを返した。  
すると橘君がまた書いてきた。

「いつも」

「一人なの」

「ぼくも」

「同じ」

なんとなく感じ取っていた事を橘君に改めて字にして書かれて僕は少し照れた。

彼は続けた。ゆっくりと慎重に。

「ぼくは」

「長いこと」

「外 でてない」

僕は驚かなかった。  
そして書く。

「ぼくも」

橘君も僕がそういうと予想していた様に、微笑んだ。  
彼はゆっくりとまた続けて書いた。

「ぼくたち」

「こんなに」

「近くに」

「いたのに」

「全然」

「気がつかなかったね」

まるで恋人にいうようなその台詞に僕は少しだけ笑った。

「でも」

「今は」

「気付いてるから」

僕がそう書くと橘君は

「これも」

「運命 かね」

と書いた。

どうやら彼は運命論が大好きらしい。

「かもね」

僕はそう書いた。

「お願いがあるんだ」

と橘君。

僕が彼を見つめていると、橘君は続きを書いた。

「ぼくと」

「きょう争を　しょうよ」

僕は彼を啞然と見つめた。

「どっちが」

「早く」

「でれるように」

「なるか」

一瞬僕は彼が何を言っているのか理解出来なかった。  
突然の競争願いに困惑する以上に意味がわからない。  
出る……？

同時に僕の心臓の音が大きく耳にこだまし始めた。

出る…。

この生活から…出る…？

僕の胸が高鳴った。

未来の事なんて予想した事も無かった。

僕も…ちゃんと…生きれる…？

僕は驚いた様に橘君を見た。

橘君は少し寂しそうに笑っていた。

僕はそんな彼を見て頷いた。

出る…。

出れる…？

出たい…。

もう、やっぱり、出たい…。

僕はまた強く何度も頷いた。

そんな様子を見た橘君が書く。

「じゃあ」

「これからは」

「お互い」

「ライバルだね」

僕は固唾を飲み込んだ。

僕はライバルという存在が嫌いだった。だからこう書いた。

「ライバルじゃない」

「ともだち」

自分のかいていることの臭さに僕は恥ずかしくなったけど、嫌な気持ちにはしなかった。

橘君も恥ずかしそうに笑むと、何やら書き始めた。

「じゃあ」

「ともだちなら」

「どっちが」

「勝っても」

「最後は」

「負けた方を」

「迎えに行くこと」

僕は強く頷いた。

「約束」

僕らはお互い「約束」と書かれた紙を見せあった。

窓越しの隣人同士はこの日から、奇妙なレースを始めることになった。

勝つ方法は一つ、家を出られる様になった方が勝ち。

そして、どちらかが勝った日、僕らは初めてお互い直接会う事になる。

それまでは共に窓越しにがんばること。

そのふとしたレースは、永遠に暗闇のように思われた僕の胸に、それまで気付かなかった「出る」という希望の光を照らし始めた。でも、僕はこの時考えても無かった。

何故、あの隣人が僕にこんなレースを始めようといったのか。

そして気付く事もなかった。

彼との「約束」に込められた彼の願いも。

## 11・居間で

最近僕は朝早く起きる。

起きる時間はまばらで、朝7時に起きたり、10時におきたり。早く起きた場合は朝食は居間で作ってもらってそれをいそいそと部屋にもっていく。

あるいは、居間に出没して、母親に自分を確認させて部屋まで持ってきてもらう。

やっぱりなんだか親と一緒に食べるのは考えられなかったから。

その日は、居間で母親が朝食を作るのを待っていた。

父親がダイニングテーブルで出かける前の唯一の朝食、コーヒー杯を新聞を読みながら飲んでいただけ、

僕はキッチンにいる母と父親に背を向けて、テレビの前に置いてあるソファにちょこんと座ってテレビを見ていた。

もちろんテレビはいつも、モノ ミンタ司会の『朝からずっぱり』というニュースだ。

両親と僕との会話はもちろんないし、父親にも母親にも挨拶さえもない。

正直、僕は両親を避けていたし、憎しみさえも感じていた。

深く関わりあいたくも、口をききたくもなかったけど…、彼らと向き合うということは、僕がこの生活から「出る」ために不可避なこととは僕だってわかってた。

だから、今の僕が精一杯できること、朝、こうして一緒に空間にいろことを、今試みている。

僕はこの朝のコーヒーが香る空間が嫌いではないようだった。

モノ ミンタ司会のニュースはとてもおもしろかったし、度々みる

ようになつたおかげで世情に前よりは詳しくなつた。

窓の外は、木枯らしが吹いていた。

最近はずっかり寒くなつた。

居間にはストーブが焚かれ、僕の部屋よりも断然温かい。

それだけでも、ふとした居心地の良さを感じてしまう。

そんな事を思いふけていた僕の後ろで、父親がゆっくりと立ち上がったのがわかつた。

僕はあえて反応はせず、顔はテレビに向けていた。

「行ってくる。」

父親は誰に言つたのか、ぼそつと呟いた。

そしてそのまま母親ともども、玄関へと向かつた。

彼らが居間から出て行つて、居間のドアが閉まるのを確認してから

僕はふと後ろをみた。

当たり前だが、彼らの姿はもう見えない。

僕は居間に一人だつた。

とたんに居間の広さを実感する。

「…。」

僕は黙つてテレビに顔を向け直した。

僕の両親は、変わった、と思う。

昔は、僕は父親がとても好きだつたように思う。

父親は一人息子の僕を可愛がっていたし、共にキャッチボールをしたり、サッカーボールで遊んだり。

僕にとって父親は大きな存在だった、昔は。

父親が頭が良かった。

僕に良く勉強を教えてくれた。

父親は強かった、かつこ良くて、何でも出来て。

そして厳しくて怖かった。悪い事、行儀の悪い事をするときい剣幕で怒られた。

僕はそれを恐れていた。

いつの間にか、例え用のない憎しみと嫌悪感を抱く様になって、そして父親はあの日を境に変わった。

数年前、僕が初めてこの居間で彼らに手を挙げた日を境に。

あの日のことは、まだ覚えている。

あのころは不登校をしながらも、まだ両親と一緒に食事をとったりしていた。

あの日、夕食の時、ささいなことでキレて、気付けば辺り一面の家具を投げ飛ばしていた。

夕食と皿が無惨に散らばる部屋の真ん中で、母親は腰を抜かした様に、僕を見ていて、その怯えた目が気に入らなくて、気付けば、母親に散らばった皿と夕飯だったものを投げつけていた。

今までの恨みつらみを言葉にして、叫びながら。

止める様に父親が僕を遮って、矛先は父親に向かった。

あのころは小柄ではあったけど、今よりは健康的な体をしていた僕に、長身ではあるけれど中年の父親はかなわなかった。

もみあいになって、父親に手をあげた。

それは、父親の腹に命中して、父親が僕の目の前で倒れ込んだ。

それでも暴行を続けようとした時、父親はうずくまりながら僕を見上げた。

その時の父親の目がまだ忘れられない。

それから何かが変わってしまった。

父親は変わった。僕らの親子の関係も変わった。気付けば、彼は僕が思っていたよりも、小さくて静かな存在になっていた。

どこか影を持つ、寡黙な人に。

…昔もそうだったろうか？

最近居間にいて気付いたが、彼はほとんど母親にも無駄に話さないようだった。

もちろん僕にも最低限の挨拶をするだけだ。

僕にとっては逆にそれが居心地が良かったけれど。無駄に話されてはたまらない。

「いつてらつしゃい。」

母親の声が玄関から聞こえた。

母親はいつもああやって父親を見送る。

母親が居間に入ってくる音が背後でした。

朝食の用意をしているのかキッチンから音がする。

一番変わったのは、母親だろうか。

一人息子の僕に、幼い頃から習い事を率先してやらせたのは母親だった。

ピアノに絵画教室、ヴァイオリンに子供英会話。

僕は母親の夢を精一杯に背負い込んで育てられた。

がんばってやると、僕はすごく誉められた。

書いた絵を母親にプレゼントして、それを居間に飾ってくれたのがすごく嬉しくて。

ピアノやヴァイオリンが嫌で、練習をさぼっていると、ものすごく怒られた。

小学校に上がってからは、僕の習い事はまた増えた。

スイミングスクールに、習字、柔道に、そろばん。

嫌だと思ったものは、止めていいと言われた。

でも、僕が唯一止めたのは、ヴァイオリンと絵画教室だけ。

だって上手くやると、本当に喜んでくれたから。

その笑顔をみるのが本当に誇らしくて、誉めてくれるのがひたすら嬉しくて。

ただ、学校のテストに支障がでると、母親は焦ったのか、その度に習い事を減らそうかと僕にいった。

僕は母親が言うならば、と、そのとき一番興味がないものを言う通りに切り捨てて行っただ。

小学校では常に上位のほうにいた。

なんでもがんばった。

そして、がんばれば幸いなことに結果がついてきていた。

親戚は僕を天才児だ、将来が楽しみだ、と誉めた。

母親は僕を自慢の息子だといった。

僕は母親の進めで有名私立中学に進学した。

そこでも、上位の成績を出していた。

塾にも一生懸命に通った。

夜遅く塾から帰ると、母親が温かい食事を用意していてくれた。

本当に幸せ者だと思い込んでいた。

親戚は僕を天才少年だ、将来が楽しみだと誉めた。

母親は僕を自慢の息子だといった。

でも、頭はいいヤツらなんて腐るほどいた。

抜かされて、気付けば、平凡な僕がいた。  
塾でも付いて行けない自分がいた。  
そして、ついていけない自分に焦ってた。  
親戚は言った。がんばってるね、と。  
母親はいった。大丈夫、あなたはがんばってるから、と。

高校受験で挫折した。  
とはいっても中堅の高校に入ったけど。  
親戚は、おめでとう、と言った。  
母親もいった。よかったね、と。

高校での勉強は悲惨だった。  
名目上の友達も数人できたけど、おもしろいことなんて何もなかった。

気付けばやる気も起きなくなってた。  
母親は言った。大丈夫、大丈夫と。  
そして学校に行かなくなった。  
母親は言った。どうしたの？どうして？と。

あれから数年がたって、僕は酷くなるいっぽうだった。  
僕が本格的にひきこもるにつれて、母親は趣味で習ってた様々な習い事をどんどん止めてった。  
今でも、週に一度だけは、何かの習い事をしている様だけれど。  
初めのうちは僕に無駄に話しかけていた母親も、今では無駄なことは一切いわなくなった。  
ただ毎日僕にとびきり美味しい食事を作ってくれる。  
そして、僕がメモで「ツナ缶が食べたい」と書いたら、その次の日の昼食はツナマヨと野菜のサンドイッチだった。  
「ツナ缶がそのまま食べたい」とメモに書いたら、その日の夜は、

ツナともやしの和え物が夕食のメニューに入っていた。

「ツナともやしの和え物は塩しか使っていないから、そのまま食べるのとあまり変わらないはず。」と書かれたメモと一緒に。

僕はそれから度々母親にメモで何が食べたい、とかをいうようになった。

「スゲル。」

ふと、母親の声が後ろから聞こえる。

「朝ご飯できたよ。」

僕が振り返ると、母親がダイニングテーブルに、盆の上に綺麗に並べられた朝食を置いていた。

僕はソファからゆっくりと立ち上がって、ダイニングテーブルに座った。

今日はがんばってダイニングテーブルで食べてみようと思った。すると、母親が自分の分の朝食を持って僕の対角線上に座った。

「いただきます。」

母親がそれだけ言うと、パンにかじりつき始めた。

僕は思わず顔を背けて、立ち上がった。

無言でお盆をもって自分の部屋へと向かう。

さすがに一緒には食べたくなかった。

僕は自分のぼろぼろの部屋に行った。

寒くて、カーテンが開いているものの、薄暗い。

窓は結露していた。

思わず溜息が出る。

僕は窓辺に座った。

冷気がはいってきて少し寒いが、この場所が一番落ち着いた。  
僕は窓の外を眺めた。

左隣の高校生の部屋も向かい夫婦の部屋もカーテンが開いている。  
生活をしているんだな、とふと思う。

橘君の部屋はカーテンは閉まっている。

どうやら昼にいつも起きるらしく、橘君はいつも昼過ぎに顔を出す。

ここ毎日、僕は橘君に会っていた。

たわいもない哲学的な話をして、一日を終える。

そして、夜はいつも一緒に食べる。

橘君の夕食はいつも不思議だ。

初めはツナ缶だったが、最近はサバ缶に変わった。

彼と食べる夕食はいつも美味しい。

いつも、彼が先に食べ終わってしまうけど。

朝食を食べ終わって僕はお皿を出しに、部屋の扉の近くに寄った。

鍵を開けて、扉を少し開ける。

しかし、僕は扉の横に食器を置いてからふと手を止めて、また食器  
の盆を手にとって立ち上がる。

扉を開けて、盆を持って、キッチンへ向かった。

キッチンにも居間にも母親の姿はなかった。

僕は、その盆をキッチンの綺麗なシンクの隣に置いた。

そして、キッチンを後にする。

「あら、スゲル。」

廊下で母親に会った。

コートを着て、化粧をしている。

出かけるようだった。

僕は母親を素通りして自分の部屋に入って行った。

ドア越しに母親の声がした。

「今日は習い事の日だから、出かけるね。」

昼食は冷蔵庫に入ってるから、自分でチンして食べてね。」

母親は今日が例の唯一の習い事の日らしかった。

母親の遠ざかる足音が聞こえたかと思うと、

「いつてきます。」

と聞こえて、続けて玄関がガチャンと閉まる音が聞こえた。

僕は一人になった。

思わず、窓辺に座り込む。

近くの腕時計をみる。

まだ8時32分。

僕は近くに転がる本を手にとって、昼の訪れを待つ事にした。

## 12：紙がなくなつて

その日、母親は午後4時頃に帰ってきた様に思う。夜にはちゃんと僕の夕飯を作ってくれた。

僕は今夕飯のスパゲッティをつつきながら橘君と食事をしていた。橘君は今日も缶詰を食べている。今日は何かの蒲焼きらしい。

でも、さすがに僕も疑問に思い始めていた。何故、彼はいつも缶詰なのか。彼にそのことを僕は聞いた事がなかった。

僕は食べながら彼の顔を見ていた。夜だからよくわからなかったけど彼の顔は細くて健康的ではなかった。

ふと彼と目が合う。

彼は食べ終わってしまったようだ。いつものように空の缶詰を見せて、少しだけ笑う、いつものあの笑みで。

僕も笑みを返した。

でも、なんだか腑に落ちなかった。

僕も夕食を食べ終わった。

僕は傍らに置いてあった紙を拾った。

そこにはもう既に「ごちそうさま」と書いてある。

僕はそれを彼に見せるとかれも同じ事が書いてある紙を見せた。

それは僕らにとっての食事終了の合図であり、食器を片付けるための合図だった。

僕らはその紙をお互い認識すると、窓辺から消える。

僕はお盆を持って、ドアの近くまで歩いた。

鍵を開ける。

僕は意を決して、ドアを大きく開けて、盆を持ってキッチンがある居間へと向かう。

僕が居間のドアをあけると、驚いた様にダイニングテーブル一人で食事を食べていた母親が顔を上げた。

母親は少し微笑むと、またテレビに顔を戻した。

テレビには何やら騒がしいバラエティー番組が付いていた。

僕はキッチンへと入り込むと、シンクの隣にその盆を置いた。

そして、母親を尻目に、居間を無言で出て行った。

部屋へと戻り、鍵を閉め、僕は窓辺に座った。

橘君はまだ戻ってきていない。

僕は近くに置いてある紙を見つめた。

使用積みの紙ばかりが増えてもう新しく書ける紙はほとんど残っていないかった。

母親のいない間に居間に使えそうな紙を探しにいったが、そういえばは見つけられなかった。

僕は残り少ない未使用の紙を拾い上げた。

そしてそのうちの一枚に

「この紙が最後」

「紙がなくなった。」

とあらかじめ書いた。

そしてそれを床に置く。

橘君が帰ってきた。

食後の会話の始まりだ。

僕は思わず聞いていた。

「いつも」

「缶詰で」

「大丈夫？」

と。

橘君は無表情で返事を返す。

「大丈夫」

僕は何故いつも缶詰なのかと聞きたかったが、それはなんだか聞いてはいけないような気がした。

そんなことを思っているとふと橘君が続けた。

「でも、」

「やっぱり ちよつと」

「物足りない かな」

と。

「ご飯が 食べたい」

彼はふとそんなことを書いた。  
思わず

「食べればいいじゃないか。」

と思ってしまうが、すぐに、それが出来ないからいつも缶ヅメ単品  
のみなのだということを僕はすぐに察した。

親はどうしているんだろうか…。

僕の脳裏に、ふと今まで排除し続けていた疑問が浮かぶ。

でも、その話題は恐らくタブーであつたし、彼が話したくなつた時  
は、彼から話題を切り出すべきだと僕は思っていた。

彼も僕に家族や過去の事は一切聞かない。

だから僕らは未だにお互い家族の話をしたことはない。

過去のことにについて何も話さないからお互い、何故ひきこもってい  
るのかは謎だった。

「ご飯 食べれないの?」

思わず聞いてしまう。  
橘君は頷いてこう書いた。

「炊飯器の使い方が」

「わからない」

唐突の彼の言葉に僕は頭を抱えた。

炊飯器の使い方なんて僕が知るわけがない。  
でも、「僕もわからない」と書いて返すだけでは、あまりにも橘君が哀れに思えた。

僕はとっさに下をみて、「ちょっと待って」とかかれた紙を探して、見せた。

橘君が頷くのを見てから僕は窓辺を立った。

床にある未使用の紙を拾ってメモを書く。

「炊飯器の使い方が知りたい」

僕はそう書いて部屋を出て行った。

目的地は居間。

僕が居間の扉を開けると、母親が再び驚いた様に顔をあげた。  
相変わらずまだ食べている。

食べるのが遅いらしい。

僕はそのままキッチンに入り、そのままにして置いてある僕が夕食に食べた盆の上に、使用積みの食器に添えてそのメモを置いた。  
そのまま何も無かった様にそそくさと、部屋へと戻って行く。

部屋に入ると、鍵を閉め、窓辺に戻った。

僕は早速紙を拾って書く。

「明日には」

僕はそこまで書いて次の紙を探した。  
焦った。

未使用の紙が見つからないのだ…。

僕は仕方がなくさっき書いた紙を見せる。

「この紙が最後」

「紙がなくなった。」

それをみた橘君は驚いた様にぼかーんとしてから、やっと意味が飲み込めたのか残念そうに返信した。

「わかった」

「今日は これで」

「お開きに しょうか」

僕は申し訳なさそうに頷いた。

橘君が「おやすみ」と書かれた紙を見せる。

僕は足下を探つてそう既に書いてある紙を探した。

見つけてはそれを彼に見せる。

お互いそれを見合つて、カーテンを閉める。

それが橘君とのいつもの別れ方だった。

僕は閉まったカーテンを見つめながらふくと溜息をつく。

ああ、どうしよう…。  
これはまいった…。

僕は部屋を力なく見渡したが、筆談に使えそうな紙がないことぐらい知っていた。

無駄だと知りながら、傷だらけのテーブルの引き出しを開けてみるが、使えそうなものは何もない。

僕は紙が欲しかった。

そう、どうせならノートがいい。

ああ…どうしよう、どうしよう…。

紙がないと、僕は橘君と話す事ができないのだ…。

僕は床にある使用済みの紙の中から比較的綺麗なものを見つけ出しでは、綺麗な部分をちぎり、メモを書く。

「ノートが欲しい。」

僕は部屋を出ると、それをもって居間へと向かった。

居間のドアを開けると、キッチンで洗いものをしている母親が振り返った。

何度も何度も居間にくる僕を珍しそうに見る。

すると、洗いものをしていた手を止めて、濡れた手を近くにあったタオルで拭く。

そして、エプロンのポケットに手を入れると何やら取り出して僕に渡した。

「これ、炊飯器の使い方。」

僕は綺麗に折り畳まれたメモを無言で受け取った。

それを確認すると、僕に背を向けて、またシンクの前にたち、洗  
物を始めた。

そのメモを開くと、**図解で丁寧**に書かれていた。

僕はそのままそれを閉じて、握った。

握った手が心無しか震えている。

震えていたのは心なのかもしれないけど。

「ノートが欲しい。」母親に渡そうとしていたそう書かれたメモを僕は力強く握りつぶした。

ドキドキした。

…僕は…

握りつぶした拳に更に力を入れる。

僕は決心したように震える唇を動かした。

心臓がばくばくする。

「あゝ。」

唇から乾いた声が出た。

母親は手をとめて、静かに僕のほうに顔を向けた。

シンクの水道からは、勢い良く水が流れ出ている。

その空間には水道の水の音だけが響いていた。まるで僕の次の言葉

を待っている様に。

声がわずかにうわずっていた。

喉の奥がカクカクなっている。

まともに母親に声をかけるのは久しぶりだ。

でも…

「…ノ…ノートが…」

そこまでいって唾を飲み込む。  
息継ぎが難しい。

「ノートが欲しい。」

伏せ目がちに僕はそこまで言うと、そのまま駆け足で自分の部屋へと戻って行った。

一生懸命になっっている自分に苛立った。

恥ずかしいし、憎むべき相手を許そうとしている自分が許せなかった。

歯がゆいし、今までの自分を否定してしまうようで、嫌だった。

僕は勢い良くドアを閉めると鍵をかけた。

僕の心の中で黒いものが浸食し始める。

少しでも素直になろうとした自分に後悔の念が襲った。

まるで、あの女に自分の弱みをさらけ出した様な気分になって、胸

くそがいつきに悪くなる。

僕は苛立ちながら無言で窓辺に座り込んだ。

カーテンを少し開けて外を覗く。

静かだった。

橘君の部屋はもちろんカーテンはしまっていた。

でも、それをみただけで不思議と僕のこころは徐々に落ち着いて行った。

…そうだ…。

僕は…。

…出れるんだ…。

その頃、母親は笑っていた。

水道からの水を出しっぱなしにして固まった様に。

戸惑った様に、嬉しそうに。

目は心無しか潤んでいた。

僕がそれを知る由はなかったけれど、僕の周りで何かがほんの少しずつ変わり始めていた。

## 12・紙がなくなつて（後書き）

こんにちは。ここまでおつきあいして読んで下さっている方々、本当にありがとうございます。

自分の中ではやっと、全体の半分にとどり着いたかなというところまでやってきたので、感謝の意を込めて、後書きなんぞを書いてみました。

それにしてもスグルも、その家族もとても純粹ですね、自分で書いてこれでもいいのかなんて思つてしまいます。つつこみどころ満載ですが…、これからどうぞ「窓」を宜しく御願ひ致します。

ご意見ご感想などございましたら、今後の制作の上でも参考になりますので、どうぞ宜しく御願ひ致します。

### 13・窓越しに傷ついて

次の日、珍しく僕は昼に起きた。

ドアを開けると、昼食が置いてあって、その隣にはビニール袋。中には5冊パックのノートが入っていた。

僕はそれらを部屋に入れて、窓辺で、昼食のパンをかじりながら、ノートの真新しいページにペンで書いて行く。

炊飯器の使い方を。

窓の外は晴れ。

とはいっても、箱庭に面してるこの庭に、あまり日の光は入ってこないけれど。

僕は昼食を食べ終わると、食器を持って、居間のキッチンへと向かっていった。

居間に入ると、母親と珍しく父親がいる。

今日は週末だったようだ。

「おはよう。」

二人はそう言った。

それが嫌味に聞こえて、僕は苛立たしげに眉をしかめた。

そんな僕の様子も気にする事無く両親が会話の続きを続けた。

「で、前も同じ様なことがあったから、いつも管理人さん、たまったポストのモノを橘さん家の玄関の郵便受けまで入れに行っていた

みたい。」

そのふとした名前に僕は反応した。

母親はうわさ話が好きだった。

以前は母親のうわさ話を聞くたびに吐き気さえ覚えるほど嫌悪していたが、それが橘君の家族のこととなると、ちよつと状況は変わってくる。

僕は彼の家族のことが気になっていた。

だから、冷蔵庫をかばかばと開けながら気付かれない様に会話に聞き入る。

父親はコーヒーを飲みながら頷いていた。

「…それに…聞いた話だと、一週間ぐらいまえか何かに、旦那さんの方が出て行ってしまったそうよ。だから今は隣には奥さんと息子さんしかいないみたい。」

橘君は今お母さんとだけ住んでいるのか。

どうやら僕以上に複雑な家庭環境なのか…。

僕は次の言葉を待っていたけど、会話は別のモノへと移っていった。

僕はそのまま居間を後にした。

部屋へと戻る。

鍵を閉めて、窓辺に座る。

橘君の部屋のカーテンが開いていた。

僕が居間にいる間に彼が開けたらしい。

僕が待っていると、橘君がふと窓に顔をのぞかせた。

「おはよう」

と書かれた紙を彼が見せて、僕も見せる。

彼は手に何かの缶ヅメをもっていた。  
どうやら彼はこれから昼食らしい。

「もうお昼食べた？」

と彼。

僕は頷いた。

「ぼくはこれから」

彼はそういつて、「いただきます」の紙を僕に見せて缶を食べ始めた。

僕は新しいノートに文字を書き込んで、缶詰を食べている彼に見せた。

「炊飯器の」

「使い方 わかった」

と。

彼は驚いた様にそれを見つめた。

缶詰を食べていた手をとめて、何かを紙に書く。

「紙、あつたの？」

思っても無かった彼の言葉に僕は頷いた。

「うん」

買ってもらっただなんてなんだか書けなかった。

「よかった」

彼は安心した様に笑った。

それは普段の寂しい笑みではない、安心した様な優しい笑み。

「もう 君と」

「話せなく なるかと」

「思ったよ」

僕も思わず笑みを返した。  
そして書き返す。

「これで」

「炊飯器の使い方も」

「教えられる」

そう書くと彼は笑った。

「食べてから」

「教えて」

そう書いてみせると、彼はまた缶詰を美味しそうに食べ始めた。

彼は缶詰を食べ終わると、席を立って、数分後、窓辺に帰ってきた。僕は、咳払いをすると、彼に僕が起きてからノートに書き写した「炊飯器の使い方」の説明を見せた。彼はその一枚一枚をメモした。

「ありがとう！」

彼は書いた。

「これで 米が 食べれる」

よかった、と思った。

「スグル君は 料理を」

「自分で するの？」

と彼。

「まさか」

と僕。馬鹿げた質問だと思った。

「何故？」

僕が聞くと、彼は続けた。

「だって 炊飯器の使い方」

「詳しく 知っているから」

と書いた。

僕はしばし沈黙した。

でも、それから素直に書いた。

「母親に聞いた。」

すると橘君は少し寂しそうに書いた。

「優しいお母さん なんだ」

僕はそれは否定しようとは思わなかった。

すんなり肯定しようとも思わないけど。

優しいかどうかはわからないけど、少なくとも、色々とやってくれることは事実だとは思う。

でも僕は書いた。

「でも」

「好き じゃない」

「口 ききたく ない」

僕が書くと、橘君は少し間を置いてから書いた。

「両親は 仲が いいの？」

と聞いてくる。

初めてだった。

彼が僕に家族のことを聞いてきたのは。

でも僕は嫌な気分はしなかった。

恐らく、僕が言えば、彼も教えてくれるであろうから。

彼の家族の事も。

僕は彼の苦しみを知ってあげたかった。

僕の苦しみを知ってほしい様に。

だから僕は書いた。

「両親は 仲は悪くは」

「ない」

橘君は寂しそうに笑った。

「スグル君は 恵まれてるよ」

僕は思っても無かったその言葉に思わずぴくんと方眉を上げた。  
そんな僕にかまわず、橘君は続ける。

「ぼくの両親はケンカが」

「絶えなくて」

「ぼくの父親は」

「出てった」

母親が言っていた噂は本当だったようだ。

「今は母親と ふたり」

「でも、 あいつは」

「もう 何も しない」

「だから」

「一人のようなもの」

「スグル君は」

「恵まれてるよ。」

僕に橘君にかけてあげられる言葉なんてなかった。

正確には、僕はちよつと彼に対して苛立を感じていた。

橘君は、僕を恵まれていると言ったから。

彼に比べれば、僕は、物理的には恵まれているのかもしれない。

彼のように缶詰を食べる必要だつて無い。

だからといって、僕の何が恵まれているのだろうか？

たしかに母親は毎日料理を作ってくれるし、毎日缶詰を食べる必要はない。

父親はうるさい事はいわない。

でも、僕はいくらにつぶされた。

僕の心を、ぐちゃぐちゃに。

僕だつて苦しい。

苦しい。

なのに、橘君は、僕を恵まれていると言う。

まるで、本当に苦しんでいるのは橘君一人であるかのように、僕の苦しみは彼の苦しみに比べれば全然かるいものの様に。彼に何がわかるのだろう。

僕らはお互い沈黙した。

正確に言えば僕一人で怒っているのかもしれない。

でも、僕は橘君にかけてあげる言葉なんてなかったし、考えもしなかった。

ただ、苛立、苛立。

辛いのは僕だって一緒だ。

不幸なのは、僕だって一緒なんだ。

橘君も僕みたいに感じてくれていると思ってた。

思ってたのに…。

裏切られた気分だった。

二人の間に何やら微妙なぴりぴりとした空気が流れた。

それを感じ取っていたのは僕だけなのかもしれないけど。

でも、橘君は、そんな僕の空気を感知取ったのか、沈黙を破ったのは、彼だった。

「これから 米を」

「炊いてみるよ。」

「だから」

「今日はこれで」

「お開きにしようか」

僕はすぐさま頷いた。

そして、力任せにカーテンを閉めた。

悲しい。

悔しい。

心を黒いもやが浸食し始める。

信じていたのに。

友達だと思ってたのに。

僕は彼に喜んでほしくて頑張っていたのに。

それなのに、彼は思ってたんだ。

彼の苦しみが僕に解るはず無いって。

悲しかった。

ひたすら悲しかった。

悲しみが僕を襲った。

たったひと言に傷ついた僕。

たったひと言のために彼を嫌いになってしまいそうな僕。

そんな自分が惨めだった。

何故たったひと言がこんなにも傷つくのか自分でさえもわからなかった。

僕の心は弱かった。

自分が思っている異常に弱かった。

惨めで、悲しくて、思っても無い言葉に傷ついて。

僕はその日、それからカーテンを開ける事は無かった。

橘君には会いたくなかった。

その夜、部屋のドアにもたれながら食べた夕飯は、不味かった。

## 14・孤独な窓辺

僕は今、居間にいる。

今は午後。

僕の部屋にテレビはないから、様はテレビを見に来たわけだ。

あれから5日間、僕は自分の部屋のカーテンを開ける事はなかった。唯一のうすぐらい光でさえも、カーテンに遮られるわけだから、部屋は常に暗かった。

窓の外を眺める事も出来ず、部屋の中で、やることもなく、ただ閉じたカーテンを見つめるのでは、心が沈んで行くだけだった。だから、ここ数日、僕はずっと居間にいた。

母親がいたが、別に僕に何を話しかけるわけでもなかった。

だから、僕は黙って居間にいた。

流石に父親が帰ってくると、僕は自分の部屋に戻るのだが。

僕はサスペンスドラマを見ていた。

午後にはいつも再放送がやっているのを知った。

特にこれといってハラハラドキドキするわけでは無いが、暇つぶし程度にはなっていた。

今日の話は、自称「主婦探偵」の主人公が幼なじみが経営する温泉に泊まり、次々と人が殺されて行く。

話は終盤を迎え、今は崖っぷちで主人公が犯人を追いつめるシーンだ。

犯人は、俗に言われるエリートの医者であり、将来を期待されていた。

犯人の男は逆上して、主人公に刃物を向ける。

「何故、殺したの…？」

と主人公。怯えつつも気丈な態度で犯人に話す。

「邪魔だったんだよ。」

犯人は薄気味悪い笑みを浮かべながら、刃物を手に主人公に近寄る。後ずさる主人公。

でも崖の縁にいる彼女にはもう逃げ場がない。

主人公が思わずその場に尻餅をつく。

全てを語りだす犯人。

「6年前に自殺した男、今沢だよ。」

「えっ…？」

「あいつは自殺なんかじゃない。俺が殺したんだよ。」

邪魔だったんだよ。

俺よりも何も秀でているあいつが。」

「そんな…そんな理由で…！」

「あいつを殺して、全ての期待も名誉も俺が背負うはずだった。なのに、あいつらは見ていたんだよ、その犯行現場を…。」

僕はそこまで内容を飲み込んでからテレビを消した。溜息をつく。

つまらない…。

つまらない。

ドラマも、ドラマの中の犯人の動機も。  
なんてつまらないんだろう。

【ジャマなものって、どうするべき？】

ふと彼の顔が脳裏に浮かんだ。

結局、僕は彼が聞いたこの質問に対する、彼の答えを聞いた事がなかった。

これからも聞く事なんてあるのだろうか…。

僕は、彼には会いたくなかった。

5日経ってしまった今、今後も彼に会わない事は僕の意地でもあつたし、なんだか恥ずかしかった。

彼はあのととき、別に怒ってなかった。

僕が一方的に怒って、一方的に会うのを絶ってしまったから、彼にしてみれば、いきなり窓から顔を出さなくなった僕の気がしれないだろう。

もしも、また会ってしまえば、僕は何をいえばいいのかわからないし、気まずさを感じそうだった。

だから、これからも、会いたくない…。

僕は外に目を向けた。

居間の窓から見えるのは、向かいのマンション。

外はとても寒いはずなのに、光が降り注いでいた。

思わず、幸せを覚えてしまいそうなの景色に、僕は溜息を付いた。

【ほんと きょう争を しようよ】

また「彼」の言葉が頭に浮かぶ。

【どっちが 早く でれるように なるか】

橘君…。

出る事を、希望を、僕に教えてくれた隣人。

僕は、夢を見ていた。

彼と一緒に、この外の世界を歩く夢。

まだ聞いた事のない橘君の声を想像しながら、色んな哲学的な話を、溢れる光の中で楽しむ夢。

僕は彼の寂しげな笑顔を思い浮かべた。

でも、すぐに頭からふりはらう。

【スグル君は恵まれているよ。】

彼の見下した様な視線が脳裏に焼き付いていた。

すぐに黒いもやもやしたものが僕の心を浸食し始める。

もうあんなやつ忘れちゃえ…。

あいつは、お前を見下していたんだよ…。

自分が誰よりも不幸だと思って、お前をずっと軽く見ていたんだよ。

心の闇が僕に語りかける。

嫌ってしまえ、嫌ってしまえ、許すな、許すな、と。

何度も何度も。

バンツ！！

僕は思わず握りこぶしで床を叩いた。

後ろで母親が驚いた様に僕を見つめる。

でも、それを僕が知る由もなく、僕はそのままその場につづくまっ  
た。

悲しい。

寂しい。

どうして、

どうして、

どうして どうして

何を恨めばいいんだろう。

自分が望んだ言葉を言ってくれなかった橘君？

それとも、あんな彼に会わせた運命？

それとも、弱すぎる僕？

それとも、弱い僕を作り出した過去？

それとも、その過去を作り出した親？

やっぱり、僕か？

全てが憎く思えた。

でも憎く思うたびに僕の心は黒い炎で焼かれる様にチリチリと鈍くいたむ。

苦しい苦しいと、うなる。

橘君は今頃、何を考えてるのかな。

5日間もいきなり顔を出さなくなってしまった僕を怒ってる？  
もう嫌いになっちゃった？

【ありがとう！】

【これで 米が 食べられる】

彼はお米が炊けただろうか。

炊けたお米と一緒に缶詰を食べてるんだろうか。

一人で…。

一人で彼はあんなに寂しい夕食のご飯を、食べているんだろうか。

僕は彼が一人で缶詰を開けて、それを白米と、暗い部屋で一人で食べている図がうかんだ。

そしてそれと同時に自分の姿が浮かんた。

寂しく寂しく、母親がつくった夕飯をドア越しに一人で食べている自分の図。惨めで、寂しくて、美味しくなんて無い。

楽しみだった夕飯は、もはや、何の意味も持たなくなった。

夕飯であるという時刻を僕に体感させるだけの、栄養をとるためだけの行為になってしまった。

むしゃくしゃして、思わず立ち上がる。

向かう場所と言えば、僕の部屋ぐらいしかない。

僕は部屋に入ると、ドアを閉めて鍵を閉めた。

カーテンのしまった真つ暗な部屋。

僕はドアに背にして、座り込んだ。

橘君と会う前の生活に戻っただけなのに、非常に物足りなく思った。僕の人生がまた全くの無意味に戻ってしまったのだから。

寂しい。

僕は独りだ。

果てしなく、独りだ。

僕は背筋がゾクゾクするのを感じた。

それは僕の部屋が寒いからだけではない。

ふと、目を窓辺にやる。窓辺の下に散らかる紙。綺麗に束になっていたけど、あの夜、橘君と別れてから、僕が蹴つて散らかした。

僕は、床に散らかる紙に近寄った。

一番近い紙を手につかむ。

「ありがとう」

そこにはいつ書いたのかそう書かれていた。

僕に似合わないその言葉に思わず動揺してしまう。

悲しいー…。

僕は無言で紙を拾って行つた。

そして、綺麗に束にまとめ始める。

悲しかった。

悲しくて胸がしくしくと痛んだ。

ためていたモノが、抑えていたモノが、頬を伝う。

かっこわるい。

今の自分はすごくかっこわるい。

涙で揺れる視界の中、紙を拾って行くと、散らかった紙の中からノートが顔をのぞかせた。

それは母親に頼んで買ってもらったノート。

それを開くと、炊飯器の使い方の説明が書かれたページが延々と続

いていた。

そこには、数日前まで一生懸命だった僕がいた。どんなに小さなことでも、何かに熱心になれた自分がいた。便りにされてると思えた自分がいた。

【よかった もう君と話せなくなるかと思ったよ】

橘君の安心した様な笑顔が浮かんだ。

胸が温かくなった。

僕は確かに誰かに必要とされていた。

…なんて馬鹿なんだろう…。

僕は涙を拳で拭った。

そして、ノートを閉じ、全ての紙を拾って綺麗に束にして、それを窓辺に静かに置いた。

窓辺が片付いた所で僕は静かに息を吸う。

ちよつと緊張した面持ちで、カーテンに手を添えて、ゆっくりとカーテンを開ける。

同時に部屋に薄暗い光が入る。

久しぶりに見る僕の窓からの世界。

でも、僕が一番求めていたものは、そこにはなく、カーテンが何事も無かった様に閉じていた。

一種の安堵感と絶望が僕を襲う。

僕はカーテンを握りしめたまま、力なく窓辺に座り込んだ。窓を通して冷気が僕の体の熱を奪って行った。

「…ごめん…ごめん…」

誰にも聞こえないような声で僕は静かに静かに呟いた。  
何度も、何度も呟いた。

## 15・窓越しの悲しみ

彼は夜になっても出てこなかった。

彼は顔をのぞかせないものの、どうやらその部屋にいるようで、彼の窓からは、懐かしいあの光が漏れていた。

あの、寂しく儚い夜の光。

彼と話すようになってから見なくなっていたその悲しい光に僕は胸が痛くなった。

まるで彼と出会ったこと自体が嘘であったような錯覚に陥ってしまった。

また、孤独の、絶望の中に戻された様な気分になってしまう。

だから、というわけでもないが、僕は待っていた。

毛布を自分にかけて、座り込んで、待っていた。

彼がもしも顔をのぞかせてくれたら何て言おうか、何を話そうか。

そんなことばかり考えて。

ただひとこと、彼に会った時のためにノートには既に書いておいた言葉があった。

「ごめん」

それだけは何があっても伝えなくてはいけない言葉だと思ったから、書いておいたのだ。

いつでも見せれる様に。

僕に時間の感覚はなくなっていた。

ただわかるのは、父親がだいぶ前に帰ってきて、居間から珍しく、

何やら口論している話し声が聞こえたから、いつもの僕の夕飯の時間はどうに過ぎてゐるであらうこと。

でも、僕は、夕食に手を付けるのも忘れて座っていた。

5日間、彼に会わないで、彼を突き放してみても解った事。

僕は、彼とやっぱり友達でいたかった。

ふと、彼の窓の光が消える。

僕はその変化に胸が揺れた。

彼が顔をのぞかせてくれるんじゃないか。

そんな淡い期待を持って思わず姿勢を整えてしまう。

でも、10分経っても、20分経っても、彼のカーテンはあかなかつた。

電気さえも消えた彼の部屋は、まるで僕を拒絶しているかの様に静かだった。

僕は下を向いて溜息をついた。

口から漏れる息がほのかに白い。

外はかなり寒いようだった。

窓は隅は酷く結露している。

僕は結露した窓に指先を滑らせた。

そして、字を綴って行く。

誰にともしせることのない文字を。

ごめんなさい

誰にもちゃんと言った事のないその言葉を窓に残して、僕は窓辺を後にした。

床に転がっている腕時計を見ると、夜の１１時近くだった。

僕はふとうなり声を上げた自分のお腹に気付き、自分の部屋のドアを開けた。

ドアの隣には、僕の夕飯があった。

僕の夕飯はすっかり熱を失い冷たくなっていた。

僕はそれを部屋に入れて、窓辺で毛布にくるまれながら冷えたみそ汁を飲んだ。

何も考えずに、窓に書いた文字をただひたすら見つめながら食事をした。

窓から入る夜の青白い光が僕と夕食を照らした。

何だか悲しくて、自分が情けなくて、味気なくて。

気付けば、夕飯を全て食べ終わっていた。

満腹感も空腹感も何も感じない。

満足感も何もない。

ただ食べ終わったのだということだけを理解して、僕はそのお盆を持って立ち上がった。

無言で静かに部屋のドアを開ける。

最近、いつもやっているように、お盆を居間のキッチンまで持って行く。

足取りはゆっくりで、僕は悲しみに包まれながら居間のドアを開けた。

居間には、電気が寂しくついていた。

父親はもう寝たのか、テレビさえも何もついていない異常に静かな居間の真ん中で独り、母親が頭を抱えて、ダイニングテーブルに座

っていた。

母は僕が居間に入ってきたのに気付いたのか顔を上げる。

「あ…。」

思わず、言葉にならない声が僕の喉の奥からこぼれた。

母は泣いていた。

目を赤くして、悲しそうに、悲しそうに泣いていた。

母がなっている姿を見たのは初めてだった。

何故泣いているのかはわからなかった。

どうせ僕のことと泣いてるのか、なんて被害妄想が浮かんで苛立が胸にざわざわと走り始めたけど、同時に胸がズキズキした。

今まで影で泣いていたこともあったかもしれないけど、すくなくとも、母親の泣いた顔を正面から見たのは初めてだった。

僕は胸が痛んだ。

人は傷つくものなのだ、とわかりきっていたことを、今更実感したような気がした。

僕は、空っぽの食器の乗ったお盆を持って、居間のドアの前で立ち尽くしてしまった。

かける言葉もなく、ただそんな母親を見つめる僕はどんな馬鹿みたいな表情をしているんだろうか。

でも、母親は僕の姿を見ると、泣きはらした目で無理矢理笑顔を作った。

そしてそそくさと鼻をすすりながら何事も無かった様に立ち上がった。

「さてと…」

そんな独り言を言ってから、僕の手の中の食器を見ると呟いた。

「明日洗うから、そこに食器置いとして。  
お母さん、お風呂に入ってもう寝るから。」

母親はそういつて、僕の横を通り過ぎて、居間を出て行った。  
僕は、独り、寂しく電気のつく居間に取り残された。

悲しい。

いいようのない悲しみが僕を襲った。

僕は悲しみを引きずりながらキッチンに入った。  
キッチンはいつも通り綺麗に片付けられていた。

綺麗なシンクの中に、使用済みの食器を置く。  
それから僕は、シンクの前に立ちすくんだ。

悲しい。

ただひたすら悲しい。

なんでか解らないけど、悲しい。

母親の泣き顔が浮かんだ。

あんなのは、悲しい。

今更だった。

今まで自分が望んで人を傷つけてきた。  
憎いと思って、両親を傷つけようと思って、暴力を振るっ  
たし、部屋をめちゃくちゃにしたことだってあった。

それで満足なはずだった。

怒って、あきれて、困った顔をしているのを見て誇りさえも覚えた。でも、僕は今まで自分が一番望んでいた彼らの悲しい顔を正面から見た事なんてなかった。

暴力を振るっても、部屋をめちゃくちやにしても、僕の目の前であんなに無防備に泣くなんて事はなかった。だって僕は、暴力を振るった後は、僕は部屋に戻ってしまったてたら。

あんな奴らの顔なんてみたくない、なんて思いながら殺意さえ抱いて、部屋に戻っていたから。

でも、それは逃げだったのかもしれない。自分がしてしまったことが生む悲しみから逃れるための。

結局、僕はいつだってそうなのかもしれない。

困らせてやりたい、憎い、憎いと思いつつも、自分がやった事が相手にどのような傷跡を与えているかを最後まで見る事がないのだ。好きなだけ暴れたて、すぐに部屋に閉じこもってしまう。暴れた後、彼らがつけた傷跡を見る事も無く。

卑怯で、醜くて、弱い。

情けないくらいに、惨めで。

涙が溢れた。

大粒の涙だ。

僕がよく一人で部屋で流していた涙。

流しているとき、あいつらが僕が部屋でなっているなんて思いもしないだろうと、あいつらを心の中で罵っていた。

自分一人が被害者なのだと、あいつらのことを心で笑っていた。  
部屋で一人で誰にも気付かれずに泣く自分を、優しく甘やかせながら。

でも、同じだった。

卑怯だった。

いつも自分一人だけだと思ってた。

本当に泣いているのは。

本当に悲しんでいるのは。

自分が愚かで惨めでしかたがない。

ただただ、涙が頬を伝った。

キッチンで一人。

誰も入ってこない様に祈りながら泣いた。

その夜、僕は初めて、食器を洗った。

スポンジに洗剤を付けて洗った。

泣きはらした目を赤く染めながら。

母親はお風呂に入っているのか、僕が洗ってる最中居間にくることはなかった。

僕は皿を洗い終わると、部屋に戻った。

青白い夜の光が窓から入る部屋で、僕は静かに眠りについた。

泣きはらした目がひりひりとしていた。

## 16・窓辺にメッセージを

次の日の朝、朝の居間はいつもと違っていた。

何が違うつて、父親の機嫌が悪かったこと。

両親は前の晩にケンカしたのか、母親が泣いていたのが関係あるのか、二人の間に流れる空気はいつもと違っていた。

母親もいつものように父親を玄関まで見送りにいなかった。

でも、母親は昨日の夜の涙が嘘の様にすっきりとした顔をしていた。どうやら母親の機嫌はいいらしい。

出かける前に、僕にひと言、嬉しそうに言っていたし。

「洗ってくれて、ありがとう。」と。

僕は今家に一人。

朝ご飯を窓辺で食べ終わって、今、その食器を洗って、一段落した所だ。

ちょっと思ったけど、食器を洗うのって少しだけ楽しいかもしれない。

僕は窓辺に座り込んだ。

窓から入るほのかな光が部屋を照らし出す。

ぼろぼろの部屋。

昔は、そのぼろぼろさに違和感なんて感じる事は無かったし、誇りさえ感じていたけど、最近の僕はどうやら変わってしまったようだ。

そのひどく荒れた部屋に違和感を感じる。

なんていうか、落ち着かない。

恐らく、綺麗に片付いた居間にいることに慣れてしまったのだろうが、僕はぼろぼろの部屋に入るたびに、孤独と寒さを感じる様になった様な気がする。

橘君に会わなくなってしまったのも関係してるのかもしれない。

…とはいっても、片付ける気なんてまっさらおきないけど…。

僕はふと橘君の窓を見た。

―閉まっている。

当たり前の事だし、自分が招いてしまった結果だけど、やはりそれを見ると、胸がズキズキと痛む。

彼に会っていない日々はあまりにも長く感じた。

…橘君…。

胸がきりきりといったんだ。

後悔。

自分で勝手に怒って、彼を一方的に突き放してしまった事。

今更後悔している。

もう二度と彼が窓から顔をだしてくれないんじゃないかと思うと、自分のしてしまったことの重さに血の気さえひいた。

僕は窓辺で待っていた。

でも、彼が顔を出す気配も、彼の窓のカーテンが開く気配も無かった。

僕はむずがゆさを感じて思わず立ち上がった。  
時間があまりにも長く感じた。

僕は部屋を開けて、誰もいない居間にいった。  
相変わらず居間は僕の部屋と違って温かい光が差し込む。  
不思議と心が落ち着く。

僕はテレビの前のソファに座ってテレビを付けた。  
テレビのいつものニュースにはモノミントが映っていた。  
僕はニュースを見つめた。

毎日のおこる汚れたニュース。  
毎日のように死ぬ人のニュース。

毎日のように、殺してしまう人のニュース。  
でも、僕にはそれが感じられない。  
この家の中にしか世界がない僕には、それらが現実のように感じられない。

どこか遠い所での出来事のような気さえしてしまう。

ただ、こんなに多くおこる酷い事件の中で、その犯人が抱いたであろう、誰かを殺したいとか、傷つけたい、という気持ちは少し理解出来たけれど。

僕も、以前酷いときは両親に殺意さえも抱いた。  
もちろん、抱くだけでそれを実行に移す気力なんて僕には無かったけど。

ただ、ちょっとだけわかるんだ。  
何かを傷つけたくなくなってしまう気持ち。  
めちゃくちゃにしたい気持ち。

でも、ここ数日、僕は以外と落ち着いているかもしれない。  
どちらにしても、それをやっぱり実行に移すなんて、やっぱりテレ

ビで放映されるニュースは僕には現実味がなかった。

「馬鹿だよ…。」

僕は殺人のニュースを見つめながら呟いた。

僕だって同じぐらいに馬鹿かもしれないけれど。

どのぐらい時間がたったのか、僕は、居間でここ数日の恒例となっていたサスペンス劇場を見ていて、もう夕方になっていた。

結局、朝から夕方までテレビの前で過ごしてしまった事になる。

部屋に戻るのは、なんだか気分が乗らなかった。

もちろん、橘君には会いたいけど、いつ会えるかわからない彼を待つのは辛かった。

空っぽの頭でオレンジ色の光の射す窓をしばらく眺めてからまたテレビに視線を戻す。

テレビのシーンは、主人公が犯人をなだめている所。もう最後だ。

『どうして…、…言うてくれれば良かったのに…。』

『…。。』

俯く若い女の犯人。その犯人の肩に優しく手を置く主人公。

『苦しんでるなら…、一人で苦しむなら、言葉にして言うてくれればよかったのよ。』

私はいつだってあなたの側にいたんだから…。」

「…。」

犯人は主人公を涙目で見つめる。

深く頷く主人公。

主人公に抱きつく犯人。

『…ごめんなさいい…！！！！』

犯人、迫真の演技だ。

思わず僕もぐつとくる。

『ごめん…なさい…。あたし…！！』

『……………罪を償って…、私、待ってるから…。』

主人公は犯人の頭を優しく撫でる。

深く頷く犯人。

最後は犯人が知り合いの刑事に連れて行かれてそのドラマは幕を閉じた。

今日のは結構面白かったと思う。

特に最後の所は胸にぐつときた。

『ごめんなさい。』

犯人が言ったこの言葉。

人を殺しておいてそれだけで済むとは思わないけど、いい響きだと思ふ。

僕も橘君に言わなくちゃいけないのに…。

そう思うと、思わず顔が曇ってしまふ。

後悔の念にまた胸が痛む。

彼は僕を許してくれるだろうか…。

嫌われてしまっただろうか…。

会って、きらわれてしまったらどうしよう…。

彼に会いたい気持ちと、会いたくない気持ちが心の中で揺れた。

…苦しい…。

【苦しんでるなら…、一人で苦しむなら、言葉にして言ってくればよかったのよ。】

ふと僕の頭にさっきのサスペンス劇場の主人公の女検事の言葉が浮かんだ。

【…言ってくれば良かったのに…。】

…言ってくればよかった…？

言葉にして…？

僕は思わず顔を上げる。

そうか…。

もしかして、彼が、僕を許そうと許すまいとそんなことは関係ないのかもしれない…。

それに…、僕は許されるために謝りたいんじゃないだろう…？

そう…、悪い事をしたから謝りたいんだ…。

彼に会えても会えなくても、どうにかして彼に伝えなきゃ行けないんだ。

言葉にして…。

会える会えない以前の問題だ…。

だったら…、だったら…。

僕はテレビを消すと、力強く立ち上がった。

部屋へと向かう。

部屋に入って、窓際に置かれたノートを開いて、「ごめん」と前に書いたページを破った。

そして「ごめん」の下に、加えて書く。

「また会いたい」

僕は書いたその紙を見て深く頷いた。

窓から外を覗くと、橘君の部屋は相変わらず閉まっている。

でも、もうかまわない。

少しでも、彼が外を見てくれたなら、それでいいんだ。

僕の気持ちが伝われば。

僕は机の引き出しを次々に開けて行つた。  
目的はセロハンテープ。

あつた。

長い間眠っていたであろうセロハンテープを引き出しからつかみ出すと、僕は窓にその紙を貼付けた。  
それをそこにセロハンテープで固定する。

これで、橘君がもしも顔を少しでも出してくれたら……、読んでもらえるかもしれない。

僕は強く頷いた。

外はもう夕暮れも落ちて、暗くなり始めているようだった。

僕は無言でカーテンを閉めた。

窓際で待っているのは辛すぎるから。

だから、部屋を後にする。

誰もいない居間でまたテレビを付けた。

居間のカーテンも閉めて、電気を付けて一人。

テレビはついていけるけれど、僕は孤独を感じた。

部屋にいても、居間にいても、僕は独り。  
でも、

「ただいま。」

母親の声が玄関から聞こえた。

その瞬間に、僕は何故かほんの少しだけ安心していた。

誰かが帰ってきてくれるという事実がほんの少しだけ僕の心を揺らした。

相変わらず僕は母親には挨拶もしないし、同じ居間にいても言葉もかわさないけれど、僕は孤独を感じなかった。  
テレビに顔を向けている僕の背中越しに、キッチンで夕飯の用意をする母の物音がとても心地よく感じられた。

## 17・窓越しの誓い

その晩、僕は寝る前に一度だけカーテンを開けて外を見たけれど、相変わらず彼のカーテンは閉まっただけで、いつものようにぼんやりとした寂しい光が窓から漏れていただけだった。

彼が僕が窓に貼ったメッセージを見てくれたのか、見てくれなかったのかわからない。

だから僕は、窓辺のメッセージをそのままにして眠りについた。

随分と寝てしまったみたいで、僕は次の日、昼前に目を覚ました。起き上がってすぐに窓辺のカーテンを開ける。

彼の部屋を見てみるが、カーテンは閉めたまま。

落胆の色をちょっとだけ浮かべたけど、僕は気を取り直して部屋をでた。

歯ブラシをして、居間へと向かう。

居間には母親がいて掃除をしていた。

窓が開いていい、冷たい風が入ってきて気持ちがいい。外は青い空。

今までのことが全て嘘だった様な気さえ覚えてしまう。

あまりにも、すがすがしい風。

「あら、おはよう、スグル。」

「……。」

僕は唾を飲んだ。

そして、声を出してみようとする。

「……………」

が、上手く行かない。

挨拶を返そうと思ったけど、今の僕にはまだ無理だったようだ。母親はそんな僕にはおかまい無しに掃除を続けている。

…。

僕は冷蔵庫を開けて牛乳を取り出して飲んだ。

デジャブ。

昔の光景と重なった。

中学の時、学校に行く前によく冷蔵庫から牛乳を取り出して飲んでいた。

こうやって、冷蔵庫の前で。

そしてその後、いつも僕は笑顔で言っていた。

「いつてきます。」と。

遠い昔のことのようにだけど、確かにそんな日々は存在して、僕は笑ってた。

幸せだった。

僕は無言で牛乳を戻した。

戻りたい…。

いや…。

戻るんだ…。

僕は戻るんだ。

…戻るから…。

もうすぐ昼になるから、朝ご飯は、それだけで済ます事にして、掃除をしている母親の背中をしばし見てから、部屋へと戻った。

部屋はやっぱり静かで、ぼろぼろ。

僕の聖域。僕の牢獄。僕の部屋。

でも…。

僕は窓辺に近寄った。

彼の無言で佇む部屋を見つめる。

橘君が教えてくれたんだよ。

僕も戻れるって…。

この牢獄から…、僕を縛り付けるこの聖域から僕も出れる事を。

だから…。

僕は君に謝らなくちゃいけないんだ…。

自分がしてしまったこと。

そして、できることなら、橘君とまた話がしたいよ。

「また…友達になりたいよ…。」

僕は窓越しにささやいた。

窓越しの小さな隣人に。

窓越しの小さな友人に。

届くはずのない小さな声で。

でもやっぱり彼のカーテンは開かない。

寂しいよ。

寂しいよ。

僕は窓辺に座り込んだ。

彼の窓辺は寂しくて。

僕の部屋は寂しくて。

心が出たいと叫んでいて、苦しいと叫んでいて。

孤独に震えていた心に、素直に語りかけてくれて、僕は本当に楽しかったんだ。

嬉しかったんだ。

救われる気がしたんだ。

橘君に出会えて。

僕は、あまりにも似た橘君の境遇を全部わかってしまいたいと…、わかった気で…、いたんだ。

だから、橘君が僕が幸せだと言ったとき、僕らが似ていた事を否定されたような気がして…。

でも、そんな小さな事に怒ってしまった自分が情けない。

僕は、もう、ただ単純に君とまた友達でいたい。

だから、本当にごめん…。

僕は目を閉じた。

ガラにもなく祈ってみる。

…神様…。

もし、神様がいるなら…、また一度、橘君に会わせて下さい。

神様…

神様なんて信じた事無かった。

むしろ、神様さえも呪いたくなった時だってあった。

何故、辛い事ばかり僕に与えるのかと。

でも、そんな僕が神様にお祈りをしている。

ぼろぼろの部屋で。

滑稽だった。

でも…。

何かにすがりたかった。

…何分たっただろう。

コンコン。

一瞬耳を疑った。

コンコン、コンコン。

聞き覚えのあるその音に僕はゆっくりと顔をあげて、目を開いた。

心臓がばくばくになっていた。

信じられなかった。

あまりにもタイミングが良すぎた。

橘君が、いた。

窓辺に。

無表情で。

窓を叩きながら、僕を見つめていた。

「た…橘君…。」

息が漏れる様な声で僕は彼の名前を呟いた。

信じられなかった。

待ちに待っていたことがあまりにも、突然訪れて僕は困惑していた。何をしていたのかわからず、僕は彼を見つめ返す事しかできなかった。

僕らはお互い見つめあった。

でも、すぐに、橘君が吹き出した。

そして、

「にらめっこ?」

と書かれた紙を差し出した。

彼の顔には怒ってる様子は見られなかった。

ああ…。

僕の心が揺れた。

嬉しくて、びっくりして。

思わず目が涙ぐむ。

そして、視界を半ば遮っている様な、窓辺にはったメッセージを剥がして、新しくノートに書く。

「ごめんなさい」

それを見せると、橘君は冷静な顔つきに戻って僕に返信をした。

「どうして?」

僕はたじたじになりながら、筆をノートに滑らせる。  
頭が真っ白だ…。

「急に姿を見せなくなってしまったから」

それを見せると橘君はまたも無表情で、返信をした。

「よく わかんないけど」

「嫌われたかと 思ってた」

僕はそれを見て強く首をふった。

「嫌ってなんて ないよ」

「ごめん…」

そう書くと橘君はほんの少しだけ寂しそうに笑ってくれた。

「なら よかった」

僕は彼の笑顔に本当に申し訳なさを感じていた。  
橘君は続けて書いた。

「やっぱり パソコンよりも」

「スグル君と 話してる方が」

「楽しいから」

僕は聞いて見る。

「パソコン？」

橘君は頷いた。

「インターネット」

「一日中やってたけど」

「あきちゃった」

そう言えば、橘君の趣味はインターネットだった。

そういえば、ここ数日彼の部屋の窓からもれていた淡い光は、パソコンの画面の光だったのかもしれない。

僕はそんなことを思いながら彼の文字を読んで行った。

「スグル君と」

「あつてから」

「長い間やってなかったけど」

「ココ数日は」

「またやり始めてたんだ」

と彼。

彼は続けた。

「ボクと初めて」

「あつた時のこと 覚えてる？」

突然の質問にボクは頭を回して考えた。

彼と初めて会ったとき。

それは、突然で、いきなり橘君の窓が開いて…、橘君はびっくりしてすぐに窓を閉めちゃったんだっけ。

僕は頷いた。

彼は続けて書く。

「ボクのパソコン」

「あの日に壊れたんだ」

突然の彼の話の展開によく理解出来なかったが、頷いてみる。  
彼はまた続ける。

「ボクはそれまで」

「パソコンばかりやってて」

「壊れたとき、人生が終わった様な」

「気がしたんだ。」

…。

僕は彼の言葉をただ見つめた。

何故パソコンが壊れると、人生が終わるのかはよくわからないけど、  
それだけパソコンが好きだったということだろうか。

「それからパソコンがない生活で」

「でも、スグル君にまた会って」

「ボクは」

そこで、すこしだけ彼の書く手が止まった。  
でも、しばしの沈黙の後、彼はこう書いてきた。

「嬉しかった」

なんだか話の流れはよくわからないけど、ボクは彼が嬉しかったと  
いつてくれたことがとにかく嬉しくて、嬉しくて、思わず、にまけ  
た顔を手でかくしてしまった。  
そして僕も書く。

「ぼくも」

「嬉しかった」

橘君は笑った。いつもの少しだけ寂しそうな顔で。  
でも、僕はともうれしかった。  
彼が僕の前にいてくれること。

そして、こんな僕を許してくれたことが、なによりも、嬉しかった。  
それにしても、彼のパソコンは直ったのだろうか？  
壊れたのなら、最近使っていたパソコンは？

「パソコン、直って」

「よかったね」

僕は彼に書いた。  
すると、

「直してない」

「スグル君と」

「話せなくなつて」

「居間のパソコンを部屋に」

「もつてきたの」

僕は無言で頷いた。

彼はわざわざ居間のパソコンを部屋に持ってきたのだから、よほど自分の部屋が好きなんだろうと思つた。

僕も人のことが言えた立場ではないけれど。

それにしても、居間のパソコンということは、家族のパソコン…と  
いうことだろうか。

彼の家族はもうパソコンを使わないのだろうか？

【ぼくの父親は 出てつた】

橘君の言葉がふと浮かぶ。

そうだ、彼の家にお父さんはいないんだ…。

残つた彼のお母さんは、パソコンなんてあまり使わないのかもしれない…。

それに…、一緒に住んでるのに、自分の息子に缶詰しか食べさせないなんて、ある意味ちよつと気が知れない…。

ふと、僕の頭の隅に自分の母親の姿が浮かんだ。

常に料理や掃除をしている母親。

僕が何一つ話さなくても、話しかけてくれる母親。

…そして、

静かに静かに一人で泣いていた母親…。  
でもいつも微笑んでくれる母親…。

お母さん…。

僕は橘君を見つめた。

僕の友達。

僕は書いた。

「ご飯 炊けた？」

橘君はそれを見ると嬉しそうに頷いた。

それは橘君が時々見せる陰りのない笑顔だった。

「うん！！ ありがとう！！」

「美味しかった！！」

彼の満面の笑みに、僕は薄く笑った。

なんだか、思い知らされた様な気がした。

僕は本当に橘君よりも全然恵まれていた。  
炊飯器の炊き方ぐらいで、僕はここまで喜べない。  
彼は追い込まれていたのかもしれない。

缶詰で自分のお腹を満たしてその場をしのんではいたけれど。  
僕は、橘君と同じ境遇なんかじゃない。

全然違っていた。

僕と彼は全然違う。

僕はうぬぼれていた。

彼と僕は一緒だと。

彼の気持ちならわかってしまっ、と。

でも、そんなのは、浅はかな思い違いだった。

僕は、彼は全然違う…。

僕には、彼の辛さはわからない。

彼に僕の辛さがわからないように。

ただ、僕らはお互い辛かった。

それだけは、似ていたのかな。

僕は、ただただ自分の浅はかさに憤慨した。

橘君に少しでも苛立った僕に。

自分が一番不幸だと思っていた自分に。

そして、その「不幸だから」ということを誇りにさえ思っていた自分に。

もう止めにしたい…。

そんな自分も。

悲しい思いも。

僕は深く息を吸った。

心が揺れていた。

言葉では言い表せない気持ちで、心がすごく揺れていた。思わず、泣き出してしまいそうなほど。

もう止めよう。

もう逃げるのは、感情に流されて漂うのは。もう、止めよう。

僕は強く自分に頷いた。

そして、書いた。

「橘君 ぼく」

彼は僕の次の言葉を澄んだ瞳で見つめて待った。

そう、変わろう。

「出る」ことは、僕にとっての夢物語でもなんでもない。希望の光でも、美しい幻想なんかでもない。

出る事は、僕の人生なんだ。

だから、僕は出なきゃ行けないんだ。

出て、自分の人生を取り戻さなきゃ行けないんだ…。

僕は書いた。力強く。

「ここから 絶対にでてみせる」

僕の強い意志に橘君は真剣な表情で頷いた。

僕は続けて書いた。

「そしたら 一緒に」

「いっぱい話そう」

「美味しいものを」

「食べながら」

橘君はそれを見ると、いつもの少しだけ寂しそうな笑みで微笑んだ。  
そしてこくりと小さく頷いた。  
少しだけ切なそうに。  
少しだけ寂しそうに。

## 18・窓越しの相談員

僕は今、居間にいる。

思い立ったが吉日。とはいったもんだ、と思う。

僕は今母親と面を向けて昼食の Pasta を食べていた。  
何やら奇跡が起きてるようだ。

成り行きは簡単。

出ると誓った僕は、まずは家族と打ち解ける所からやることにした。  
というより、「昼食の時間だね」と橘君にいったら、彼の方から家族と食べてこいと進められた。

僕が黙っていると、「出たいんでしょ？」といわれてしまった。  
出たいのなら、まずは家族、ということで、今にいたる。

母親は驚いたようだったけど、特に何も過剰な反応はしないから逆に僕には扱いやすい人でもあった。  
気を使われて、いっぱい話しかけられたらたまったもんじゃないから。

「ごちそうさま。」

母親はそれだけいうと食器をキッチンへと下げて行った。

僕もほとんど同時に食べ終わる。

僕は母親がキッチンから食後の茶を持って出てくるのを見てから、  
入れ違いにキッチンに入って、食器をシンクに置く。

本当は母親の分まで食器を洗ってもいいのだが、もの珍しげな目で

母親に見られるのはごめんだから僕は食器をただ放置した。  
ご飯も食べ終わった事だし、居間を後にしようとしたところで、僕は足をとめた。

うーん…。

なんか進歩ない…なあ…。

僕は居間の扉の前でダイニングテーブルに座って茶を啜っている母親を見た。

母親の顔はテレビに向けられているからその表情はわからない。

僕は深呼吸をした。

よし…。

言うぞ。

「…ごちそうさまでした。」

僕はぼそっと、できるだけ聞こえる様に呟いた。

母親がこつちを振り向く前に僕は、扉を開けて居間から出て行った。自分の部屋に入り、扉を閉める。

はあー、ときどきした…。

そしてすかさず窓辺へと向かう。

橘君が座っている。

橘君も僕が昼食を食べている間に食べ終わったのか、窓辺に待機していた。

彼は僕に気付くと笑った。

「どうだった？」

と彼。

僕はおずおず頷いて書いた。

「まあまあ」

「一応一緒に食べて」

「ごちそうさまも言えたけど」

なんだかなあ…。

と僕は思った。

すると彼は

「がんばったね！」

「その調子だね。」

と書いた。

誉められると思ってなかった僕は思わず困惑した表情で頷いた。

「よかったのかな？」

と僕が聞くと、橘君は書いた。

「だって今までのスグル君は」

「一緒に食べてもなかったんだよ？」

「すごい進歩じゃない？」

僕は彼の言葉を見てから考えた。  
確かに。

今までの僕からは考えられないほどの進歩ではあったのかもしれない。  
い。

劇的に変わったわけではないけど、着実に半歩だけでも前に進み出たのかもしれない。

「小さなことの」

「積み重ねだね。」

と彼。

僕はなんだか少し誇らしくなって微笑んだ。  
そして強く頷く。

頑張ろう。

すると、彼が書いてきた。

「改善点とかは？」

僕は彼の言葉に目をまるくした。

なんだか、橘君は先生のような。  
いや、カウンセラーとでもいうのか。

ずいぶんと時間がたった。

窓の外はもう暗い。

僕の家では、もう父親がさっき帰宅したのが聞こえた。  
僕らはずっと窓越しに話を続けている。

議題は、「僕がでるための秘策」。

昼の昼食の僕が、次に出来るであろう改善策とか。

あとは、夕食ももちろん、一緒に食べるとか。

父親との接し方、とか。

まずは挨拶から始めるとか。

困惑したし、でも、なんだか着実に何かを変えて行けそうに嬉しかったけど。

議題のテーマは全て僕のため。

橘君は出る気はないのだろうか？

「よし」

「これで夕飯を待つて 実行するばかり」

僕らは一通り話し終えてから橘君が満足そうに書いた。

僕は頷いた。

緊張する。

今日の目標は、

- ・夕飯を家族と一緒に食べる事。
- ・もちろん「いただきます」をいうこと。
- ・父親に「おかえり」と声をかけること。

・ちゃんと「ごちそうさま」ということ。

できれば皿洗いまでして進歩したかったが、いつきに多くの事をやるのは、難しいという結論にいたって僕らは上記の4点を今晚の夕食時の課題とした。

ただ、僕は心にひっかかることがあった。

橘君はどうするんだろう…。

橘君は僕のこと中心に考えてくれているようで、自分がどうするかを全く話していない。

僕が家族と食べる事によって、橘君が一人で食べる事になるとかは、そんなのは嫌だし、できれば、彼にも出るためのステップと一緒に踏んで行ってほしい。

彼には、彼の家族で。

ただ、彼は自分の家族の議題を出そうとしない。  
僕は思い切って聞いた。

「橘君は、どうするの?」

橘君は驚いた様に僕を見る。

僕は続けた。

「夕飯、橘君も」

「お母さんと食べるの?」

彼は無表情で僕の言葉を見つめた。  
僕は続けた。

「でるためのステップ」

「一緒にがんばろうよ。」

僕がそう書くと、彼は少しうなだれた様に俯いた。

僕は彼の言葉を待った。

すると、彼はこう返してきた。

「ぼくはスグル君の」

「専属相談員だから」

「ぼくのこととは」

「心配しないで」

彼は笑った。

作った様なぎこちない笑み。

彼は嘘をつくのが下手だ。

でも、これ以上は僕は何にもいわないほうがいいな…。

僕はしぶしぶ頷いた。

「まだスグル君はご飯じゃないの？」

彼は話題を変える様に聞いてきた。

僕は彼の言葉に床に置いてある腕時計に手を伸ばした。  
もうすぐ8時。

僕は、彼に書いた。

「もうすぐ。」

すると彼が書いた。

「いつてきな。」

「がんばって！」

僕は頷いた。

少し橘君に申し訳なさを感じながら、  
窓辺を、部屋を、後にする。

部屋の外にはまだ食器は置いてなかった。

居間へと行くと、ダイニングテーブルには父親が既に座っていて、  
テレビニュースを見ている。

机には綺麗に夕飯が並べられていた。

母親は、というと、キッチンで僕のための夕飯をお盆に綺麗に並べている。

父親は僕に気付くと呟いた。

「ただいま。」

暗い声。

なんでそんな暗い声なわけ？

僕に会うのがそんなに嫌なわけ？

被害妄想的な不条理な苛立が僕を襲い始める。

でもそれが被害妄想とか、不条理とか、僕が気付くわけも無いし、  
しつたこっちゃない。

【がんばって】

ふと、頭の中に言葉が流れた。

僕は割れに帰って、自分の中での苛立を抑えながら呟いた。

「…おかえり…。」

かなり無愛想な挨拶ではあったが、課題の一つはクリアできた。  
あやうく、キレてしまいそうだった…。

僕は胸をなで下ろした。

父親はそんな僕を驚いた様に見て少しだけ不思議そうに見つめてからテレビ画面に顔を向けた。

キッチンにいる母親は居間の扉の所になっっている僕に気付くと笑った。

「あら、スグル、ごめんなさいね、今から持って行こうと思ってたの。」

そう言って用意出来た僕のお盆にのせられた夕飯を持って近づいてきた。

僕はお盆を受け取った。肉じゃがだ。

…。  
ダメだ…。

一緒に食べるんだ…。

僕はお盆を持ったまま居間のドアの前に立ち尽くした。

母親はそんな僕におかまいなしに、ダイニングテーブルに座る。

「いただきます。」

母親がいうと、父親も続いてぼそつと

「いただきます。」

を言った。

知らないうち仲直りをしたのか、二人とも美味しそうに食べ始めた。二人の間に変な空気は流れてない。

むしろ、変な空気を流しているのは僕だった。

僕は相変わらずお盆を持ったまま、ドアの前にいた。

部屋に帰る事も出来ず、ダイニングテーブルにつくこともできず、夕飯を持って立ち尽くしている。

はたから見たら挙動不審だろう。

やはり実際の現場にでると思ってた通りにはいかないようだった。

変な意地やひねくれた思考が課題を遂行するのを阻止しようとする。

【がんばって】

また言葉が響いた。

不思議と、その言葉が響くと、胸が少しだけ温くなる。

そして、僕の意地やひねくれた思想が少しだけひるむのがわかった。

僕は頷いた。

よし。

僕は自分のお盆をもって、ダイニングテーブルで食べている母親と父親にゆっくりと近づいた。

ドキドキする。

二人は僕が近づいたのを気付くと、僕を不思議そうに見つめて僕の言葉を待った。

僕は唾を飲み込んだ。

唾を飲み込んだ音が聞こえて、緊張している自分に恥ずかしさを感じた。

【がんばって】

でも、そんな僕を後押しする様に僕の頭は彼の言葉を脳内に流した。僕はまた頷いた。

お盆を握る手に力が入る。

「…一緒に食べる。」

僕はぶつきらぼうにそう言うと、ダイニングテーブルの空いているスペースに僕のお盆を置いた。

そして、開いている席、母親の隣の席に座る。

父親は随分と驚いているようだった。

母親は昼食のことがあったから、あまり驚かなかったのか、笑って呟いた。

「お先に頂いてます。」

そういつて、何事もなかったかのようにご飯を口に運び始めた。僕の心臓はドキドキなっていた。

なんて情けない、目には涙さえ貯まってる。

馬鹿みたいだ。

でも…

【がんばったね】

脳内はタイミングよく彼の言葉を僕の脳内に轟かせた。それと同時に僕の胸が少しずつ温かくなって行く。

安堵感と、緊張とで目頭が思わず熱くなる。

僕は両親にバレない様に俯いた。

「い…いただきます。」

蚊の鳴くような声で僕は俯きながら呟いて、ご飯を口に運んだ。いっぱいだった。

でも、

美味しい…。

やっぱり人と食べるご飯はおいしかった。

…橘君は…、今頃独り…なのかな…。

ふと彼の姿が浮かぶ。

一人、窓辺で食べている姿。

寂しそうな表情で。

そんなことを考えてると、また目頭が熱くなる。

僕、変だ…。

泣きっぱい自分に少し恥ずかしさと温かさを感じながら僕はひたすら夕食の肉じゃがを口に運んだ。

「ごちそうさま。」

母親は満足そうに言った。

「美味しかったあ。」

母親はとても幸せそうだった。

父親も満たされたのか、表情が柔らかい。

食べ終わる頃には僕の心も落ち着いていて、冷静に周りが見える様になっていた。

僕も食べ終わって呟いた。

「…ごちそうさまでした。」

終わった。

今日の課題。

無事、遂行できた。

僕が安堵感に胸をなでおろしていると、母親と父親が食器を片付けるために立ち上がった。

僕も思わず自分の食器を重ね始める。  
そして、重ねた食器を母親に手渡した。

「…ありがとう。」

母親は嬉しそうに言った。

胸が温かくなった。

目頭が…また…、少し熱くなる。

馬鹿な目頭だ…！！

なんでこんなに潤んでるだろう？

僕はバレない様に目をしばしばさせた。

あっという間に食器は片付けられて、テーブルを父親が布巾で拭いている。

その父親の表情は見た事がないくらいに柔らかく感じられた。

こんな顔をしていたんだ…。

彼の顔を見ながら僕は思った。

今まで、僕は数えきれないほどのものを見過ごしてきたのかな…、と。

父親が拭き終わって、キッチンに入って行った。

僕は、ダイニングテーブルに一人残されて、立ち上がった。

でも、居間の扉を出ようとした時に母親がキッチンから出てきて僕を呼び止めた。

「スゲル。」

僕は母親を見つめた。

小柄な僕よりも小さい母親。

彼女は笑った。

「今日の夕飯は、美味しかったわ。  
いつもより全然。」

僕は母親の言葉に恥ずかしくなって、無表情を装いながら居間の扉をいそいそと開けて出て行った。

嬉しい様な、恥ずかしい様な。

自分の部屋へ入って扉を閉めると、胸が一気に熱くなった。  
目頭も熱くなった。

たえ様なない感情が胸を締め付けた。

でも、それは苦しい締め付けではなくて、言葉にできないような感情。

遠い昔に忘れてしまった様な感情。

でも、なんだか無性に温かい感情。

僕は窓辺へと向かった。

そこには橘君がいた。

僕が窓を叩くと、彼は僕に気付いて笑った。  
陰りのない笑顔。

そっという橘君の笑顔は大好きだ。

「どうだった？」

と彼。

僕はピースサインを手で作ってみせた。

もちろん、完璧、とはいかないけれど、これ以上ない冒険だったと思う。

2歩も3歩も進んだ気がした。

## 19・窓越しの別れ

それからの僕は毎日が闘いだった。

素直になれて喜んだり、キレてしまつて泣いてしまつたり。でも、何が起きても、その度に橘君に一つ一つの出来事を教えて、じゃあ次はどうすればいいか、なんて話ばかりをしていた。もうこれ以上できないなんて思つても、僕はがんばれた。多分、橘君がいたから。

僕の闘いが始まつてから2週間がたつ。

もう、今の僕にとっては、両親とご飯を食べるのが普通のことになっていた。

僕は会話はしない。

両親が会話をするのを傍で聞いている。

それを聞きながら切れそうになることなんて沢山あった。

僕はそれまで夢を見ていた。

努力をすれば、人生ががらりと変わるつて。

両親とも楽しく会話に花を咲かせながら、おいしい食事を囲んで、テレビにみるような理想的な家庭を描ける様になるんじゃないかって。

でも、最近、それが本当に夢物語なんだと気付き始めた。

それまでずっと部屋にいたから気がつかなかったけど、両親がかわす会話は嫌なもんだつた。

彼らの会話は他人の事を躊躇無く傷つける会話だつた。

自分勝手な、ヘドがでそうになる会話だつた、少なくとも、僕が聞

いてきたものは。

部屋にいた時は、距離を置いていたから彼らのいいところしか見えなかった。

いや、いい所を見ようとしたのかもしれない。

距離を少しでも近づけると、嫌な所が次々見えた。

吐き気がした。

理想と現実の違いは違ってたってわけだ。

でも、僕は努力していた。

闇雲に。

努力、具体的にはいままでに考えた事がないほど、両親との生活の中で考えてた。

自分がどう接するべきなのか、どういう風に両親の存在を受け止めて生活して行けばいいのか。

そして、僕は少しずつ自分にとっての答えを見つけ始めている様な気がした。

僕は朝ご飯を食べ終わって今、自分の部屋を片付けている所だ。

数日前から、自分の部屋を少しずつ綺麗にしている。

壁に開いた穴はどうする事はできないけれど、床に散らかっていたゴミや、家具は全て綺麗に整理した。

ぼろぼろに刻んだ昔の制服ももう捨てた。

僕にはもう必要ないものだから。

「ふー。」

最後のゴミを広いながら、思わず、呟いた。

終わった。

数日かけて始めた掃除が今終わった。  
壁はぼろぼろだけど、それ以外は一応整頓は出来た。  
今の僕にふさわしい部屋だと思った。

橘くんはというと、まだ起きていない。

彼と話すのは、いつも朝の10時ぐらいからだ。

まだ10時前。

だから、掃除が終わった僕は暇だった。

僕は部屋のドアを開けて、居間へと向かった。

誰もいない。

今は母親は出かけている。

母親は朝、散歩に出かける様になった。

最近、出かける事が多くなったと思う。

僕は居間の大きな窓に近づいた。

外を見る。

すっかり冬。

窓越しに見える、時折道を通る人達は小さく見えた。

…僕も出れる。

僕は思った。

この2週間。

僕は努力したから。

でもそれに対する喜びと同時に、僕の心にはある一つの恐怖が芽生え始めていた。

出て、どうやって生きて行く？

僕は高校を中退した形になっている。

勉強はずっとしていない。

大学に行く事なんて、考えられないし、行く意味がみつからない。

僕は、外に出てどうやって生きて行けばいい？

バイト？フリーター？

それを考えると怖かった。

外に出てしまえば、自分の存在の無意味さを嫌なほど体感しそうで怖かった。

それならば、甘えた自分だけの世界に引きこもっている方がまだ幸せに感じられた。

たとえ、それが僕の心をぐちゃぐちゃにこわそうとも。

怖い…。

僕は自分の伸びきった髪の毛を思わず手でつかんだ。

僕は、引きこもってから髪を切っていない。

伸びきった髪はだらしない。

洋服さえも、ちゃんとしたものをもっていない。

ださいのは恥ずかしい。

出た世界での生活を考えると、自分の存在が急に恥ずかしく思えてしまう。

それが僕をとどめていた。  
自分の世界に。

「あら、スゲル。」

母親が散歩から帰ってきたようだった。

上下のジャージに身を包んで、居間の扉の前に立って僕を見ていた。

「...。」

僕は母親を見つめた。

母親は僕から視線をそらすと、キッチンでココアを作ってからダイニングテーブルについた。

美味しそうにココアをすすりながら、朝刊を読んでいる。

嫌い。

それは、僕が2週間、努力しながら考えて出した答え。

僕はやっぱり嫌いだった。この母親が。

一度はその温かさに心を打たれたりする事もあったけど、嫌いだった。

一つ一つの考え方、人生に対する姿勢。

ステータスや格差に敏感に反応するこの母親が嫌いだった。

嫌いだった。

もう僕にはうるさい事は何も言わなくなったけど。

でも、彼女を縛っているその考え方は、母親の父親との会話のやり取りの中に顕著に見られた。

それを傍で聞くとたびに悪寒が走った。

父親も、母親にそっくりだった。

見ているニユースに対して母親と話をしているときも、二人はそっ

くりだった。

その話を聞いているだけで吐き気がした、泣きたくなった、腹がたつた。

両親の考え方は、僕とは根本的に違う考え方だった。

嫌いというより、受け入れるのが無理だった。

それは聞いているだけで、僕の心を針で突き刺して傷口をぐちゅぐちゅと混ぜられている様な気分になった。

僕はこの2週間、両親を許そうと、好きになろうと努力していた。でも、最近気付いた。

自分が全く好きではないタイプの人間がたまたま母親になったただけの話なのだ、何故、好きになろうとする努力が必要なのか。

だってもし、自分が受け入れられないタイプの人間に会えば、できるだけ関わりを持たない様にさせて生きるのが人間の賢い生き方じゃないのだろうか。

それがたまたま自分の両親だったからといって、何故好きになるように努力しなくてはいけないのだろうか。何故尊敬しなくてはいけないんだろうか。

ただ、この2週間努力して学んだ事、それは僕は、もう彼らを憎んでないこと。

ただ、嫌いなのだ。

相容れない仲なのだ、僕と、両親は。

だからこそ、出よう。

怖がるのは止めて。

甘えるのも止めて。

どうだっていいじゃないか。

生きて行ければ、このおりの外で。

僕はふと思った。

変わったな、僕は。

僕は、窓の外に目をやった。

出て、自由になろう。

そのためにも、一人で生きて行ける様に働こう。

バイトでもなんでもしてみよう。

怖いけど、不安だけど。

それがいい。

時間はかかるかもしれないけど。

出て行こう。

この家から。

僕は自分の部屋に戻った。

僕は窓辺で橘君のことをまった。

でも、その間、ノートの開いたページに書いていた。

出た後、やらなくてはいけないこと。

- ・バイトを探す
- ・髪を切る
- ・目標〓家を出て自立する事

果てしない目標かもしれないけど、僕は、頷いた。

出よう。

変わろう。

生きて行こう…。

怖い。

僕はその開かれたノートのページを見て、黙った。  
しみじみと、変わった自分を実感する。

本当に橘君がいなくては変われなかったであろう自分。  
彼には感謝しきれない。

そんなことを思っていると、彼との出会った頃からの思い出が頭の中を駆け巡った。

初めて会ったときの彼の怯えた様な目。

そして、彼と初めて会話をしたとき。

必死だった自分。

嬉しかった自分。

彼が僕に初めて聞いた哲学的な質問。

【ジャマなものってどうするべき？】

という質問。

それはその後も僕らがした哲学的な会話の中で唯一僕が答えられなかった質問だった。

この質問が、それ以降の僕らの会話の中に出てくる事はなかったけれど、僕は、やっと見つけた様な気がしていた。

そう答えを。

コンコン。

僕は聞き慣れたノックの音で窓の外に目をやった。

橘君だった、僕の相談員。

「おはよう」

と彼。

僕も同じ言葉が書かれた紙を彼に見せた。  
そして僕は思いつき書いた。

「橘君」

「僕出ようと思う」

彼はそれを見ると驚いた様な顔をした。

「今日？」

彼の言葉に僕は黙った。

今日出る事もできるだろう。

僕の心の用意は少なからず出来ている。

僕が迷っていると、橘君が書いてきた。

「もしも」

「スグル君が出たら」

「ぼくもこうして話す事は」

「なくなるのかな。」

僕は彼の言葉に切なくなった。

出るという事は、ただこの家から物理的に体を出す事じゃない。  
この家を出るといふ事は、社会に生きるために努力するための第一歩にすぎない。

そして、この部屋に引きこもる事によって成立している僕らの窓を介しての会話ももう必然的に少なくなつて、なくしていかなくては行けない。

だつてそれは約束だつたから。

一人が出たら、必ず、もう一人も一緒に出る、と。  
初めに出た方がもう一人を迎えに行く、と。

僕は首を振つた。

「出るのは、明日の朝」

「今日は、最後だと思つて」

「思いつきり話そうよ。」

橘君は切なさうに笑つた。

「スグル君の 勝ちだね」

僕が黙つて彼の言葉を見つめていると彼は続けた。

「ぼくたちの レース」

「勝つた スグル君は」

「負けたぼくを 明日」

「迎えに来てくれるの？」

僕は頷いた。

「迎えに行く」

「一緒に町でもブラブラ」

「しようよ。」

彼は頷いた。

「出たらどうするの？」

彼の質問に対して、僕は躊躇無く書いた。  
いままで考えていたことを。

「まずは バイトを 探して」

「ゆっくりと」

「社会に生きて行ける様に」

「がんばる」

すると橘君が続けた。

「それで？」

僕はまた書いた。

「目標は 家を 出る事」

僕が力強く書いたそれを見て橘君は安心した様に笑った。

「わかった」

「スグル君なら 大丈夫」

僕は彼の言葉に勇気をもらったような気がした。  
毎日の様に、彼に励ましてもらっていたから。

そして、こうやって彼の文字に励まされるのも最後なのだ。  
切なくなった。

「橘君 君が」

「最初に僕に聞いた」

「哲学的な質問 覚えてる？」

僕がそう聞くと橘君は不思議そうに書いた。

「哲学的な質問???」

僕は頷いて書いた。

「【ジャマなものってどうするべき?】ってやつ」

僕の紙を見た橘君は懐かしそうに頷いた。  
僕は続けた。

「ぼくは この質問に」

「答えられなかった」

「それに」

「橘君の 答えも」

「聞いてない。」

彼はとぼけたように返信した。

「そうだったけ？」

僕は真剣な表情で頷いた。

すると、橘君は少しだけ寂しそうに笑うと書いた。

「知りたい？」

「ぼくの答え。」

僕は頷いた。

すると、しばしの沈黙のあと、彼がその答えを紙に書いて見せた。

「じまなものは」

「消しちゃう かな」

僕はそれを見ると少しだけ背筋がぞくぞくするのを感じた。  
怖い答えだと思った。

僕が黙っていると、橘君が続けて紙を見せた。

「でも それは 昔のぼくの」

「答え。」

「今は こうは 思わない よ」

僕が無表情で彼を見つめていると彼は書いた。  
彼の新しい答えを。

「今はね わからないんだ」

彼はおかしそうに笑った。  
そうして続けた。

「どうすればいいか」

「わかんないよ」

悲しそうに、おかしそうに笑った。  
なんだか彼の悲しそうな困惑した笑顔にいたたまれなくなって、僕は彼に返信をした。

「橘君 ぼくは」

「答えが ちょっと だせたかも」

橘君は、静かに僕の言葉を待った。

「じゃまだと思う前に」

「避ければいいのかも」

すこしだけ沈黙した後彼が聞いて来た。

「でも、もし じゃまになってしまえば」

「どうするの？」

僕は彼の質問に答えた。

「じゃまじゃなくなるまで」

「避ければいい」

「そうすれば もうじゃまじゃ なくなる」

その僕の答えに彼は悲しそうに微笑んだ。  
彼はゆっくりと頷いてこう書いてくれた。

「いい 答え だね」

それから僕らはたわいもない話をした。

お昼ご飯は、橘君と是非食べたかったけど、彼は明日出るのだから、その前日である今日こそちゃんと家族と食べて気持ちを整えて、と僕に母親と食べる様に促した。

お昼の後も、彼と話した。

哲学的な話に、彼の好きなアイドルまりこちゃんの話。

僕が不安に思ってる将来の話。

彼は真剣に聞いてくれた。

真剣に励ましてくれた。

夜ご飯も、彼は家族と食べてこいといった。

一つ一つの積み重ねが大事なのだから、と。

僕は夕食も家族と食べた。

食器も洗ってみた。

母親は喜んでいた。

父親も最近柔らかくなった。

そんな彼らを僕はとても冷静な目で見ていた。

冷静な目でみれるほど、僕は変わっていた。

夕食後も、僕は窓辺に座って橘君と話した。

楽しかった。

切なかった。

明日は、窓越しではなくて、生身の人間として彼に会えるはずなの

に、この窓越しの奇妙な会話が切なかった。

これがなくなってしまうのは、悲しかった。

だから一瞬一瞬を惜しむ様に彼と話をした。

たわいもない話、哲学的な話。

どれも、とても喜ばしい貴重な時間を感じた。

「じゃあね」

「明日の朝10時に」

「橘君の家に」

「いくから」

僕は彼にそう約束して、僕らの窓越しの会話も終わりを迎えていた。その約束に彼は頷いた。悲しそうに笑みを浮かべて。

「スグル君」

ふと彼が書いた。

「スグル君　ぼくと　2回目に会った時のこと」

「覚えてる？」

2回目…。

1回目が彼がすぐに逃げてしまった時だから、2回目は、僕が彼と一緒に話したいと誘った時だろう。僕は頷いた。

すると、彼は書いた。

「初めてスグル君に」

「会った時、ぼく　怖くなって」

「すぐに窓を閉めて」

「もう窓を あけたくないって」

「思ったんだ。」

いきなりの話にぼくはへーっと頷いた。

そういえば、彼に二回目に会った時は、初めて会った時からだいぶ日にちが経ってからだったような気がする。彼は続けた。

「でも、2回目に会ったのは」

「ぼくがまた窓を開けたから」

「なんだけど、」

「ぼくはなんで また」

「窓をあけたと 思う？」

よく主旨がつかめない彼の質問に僕は肩をすくめた。

「わかんない」

と書くと、彼は寂しそうに笑った。

「じゃあ、明日」

「教えてあげるね」

橘君は、切なそうに笑った。

僕もつられて微笑んでしまう。

彼に明日会えるのは少しだけ緊張したし、楽しみでもあった。

「今までありがとう」

「また 明日」

僕は今まで書いた事のない言葉を紙に綴って、窓越しの彼に別れを告げた。

それは純粹な僕の気持ちだった。

彼も切なそうな笑みを浮かべながら、同じ言葉を書いて僕に返信した。

その言葉が僕の胸にしみた。

そして窓越しの僕らは別れた。

窓越しの奇妙なレースは終わった。

僕は明日橘君を迎えに行く。

## 19・窓越しの別れ（後書き）

こんにちは。

「窓」を読んで下さっている方、いつもありがとうございます。

もうこの話も終盤に入りましたが、あともう少し「窓」とおつきあ  
いください。

これからも宜しくお願いします。

## 20：窓を越えて

9：45

約束した時間の15分前。

僕が一番綺麗だと思える洋服を着ている。

大した洋服ではないけれど、僕にとっては上出来だ。  
今日母親は朝から出かけた。

だから今は家に一人。

居間で家を出る時間を一人で待っている。

もう玄関に行つて用意をしよう…。

僕は廊下へ出て、家の玄関へと歩いて行つた。

長い間履いていなかった靴を取り出す。

ドキドキした。

僕は玄関にしゃがんで靴のひもをゆっくりと結んだ。

カタン…

ふと音がした。

…？

僕の家の玄関のドアには郵便受けがついている。  
どうやらその音はそこから聞こえて来たようだった。

誰かが何かを郵便受けに投函したらしい。

僕は靴ひもを結び終えてから、何気なく郵便受けを開いた。中には、白い小さな封筒が入っていた。

僕はそれを手に取った。

…！？

「スグル君へ。」

そこにはそう書かれていた。

見慣れた文字で。

それは、間違いなく橘君の文字だった。

僕は混乱した。

何故こんな手紙がここにあるのだろうか。

彼が僕の家の玄関の郵便受けに投函したのだろうか？

すると、彼は家から出てわざわざ僕の家郵便受けに…？

どうして…??

どういうこと…???

なんでこんな手紙なんて…。

僕は混乱しながら焦る指先でその封筒を開けた。

中に入れられた2枚の白い手紙には、見慣れた文字がぎっしりと書かれていた。

【スグル君へ。

こんな形でスグル君に手紙を送る事になってしまつてごめん。

本当は、スグル君がボクの家に来てくれるまで、ボクは外に出たくはなかったんだけど、どうしても、この手紙を届けなくてはいけないと思つたから、数ヶ月ぶりに家の外に出て、君の家の玄関までこれを届けようと思う。

それがスグル君に一番迷惑がかからないことだと思つたから。

スグル君、まず第一にありがとう。

スグル君に会えて、本当に幸せだった。

友達が出来ないで、独りぼっちだったボクに出来た大切な友達だよ。スグル君が、出たいつて言つた時、ボクに頼つてくれてると思つて、すごく嬉しかった。

何より、炊飯器の炊き方を教えてくれて、美味しいお米が食べれる様になつてすごく嬉しかった。

ボクね、ずっと一人だったんだ。ずっとパソコンやつて生活してた。それで、いいと思つてた。

出れなくても、パソコン通して世界のニュース見て、ボクはボクなりに生きてつてると思つてたんだけど、君と初めて会つた日にボクのパソコン壊れちゃったんだ。

壊れちゃつて、ふと開けた窓の外にスグル君を見て、君の視線がどうしようもなく怖くて、もう窓開けたくないつて思つて。

だつて君の目と合つたとき、ボクは、自分の小ささを嫌なほど感じてしまつて。

他人つていうものにもの凄い恐怖を感じたんだ。

自分の部屋で幸せだったのに、僕は一人だった。

一人は嫌なのに、他人は怖かった。

今までの空っぽな人生は、すぐに壊れてしまうパソコンで支えられてたと思うと、無性に悲しくもあった。  
行き場のない自分の存在を痛感した。

ボクの両親はいつもケンカしていて、その数日後父親が出てっちゃんだった。

母親は、ひどい人だったと思う。

それから、ボク、自殺しようと思ったんだ。

大きな過ちも犯してしまったから。

生きてる意味がなくなってしまったから。

それを決心したら、急に清々しい気持ちになって、窓を開けようと思ったんだ。

これが、僕が窓をまた開けようと思った理由。

そしたら、またスグル君にあった。

死のうと思ってたせいか、もう君の視線も怖くなくて、無意識に挨拶してた。

でも、スグル君に呼び止められるとは思ひもしなかったけど。

死ぬ前の思い出にと思って、スグル君の呼び止めに軽く応じたけど、良かったと思う。

だって、本当はすごく嬉しくて。

気付けば、死ぬ事なんて忘れてた。

ううん、違うのかも、スグル君にあって生きる事がほんの少しでも楽しくなっただけなのかも。

ボク、スグル君に助けてほしかっただけのかもしれない。

だからスグル君に、どっちが早くでれるかレースをしようなんて言い出したのかも。

スグル君に早く出て、ボクをここから出してほしかったのかも。  
ボクはとにかく誰かに救ってほしかった。  
自分の全てから。

でも、それは現実には、なっちゃいけない話。  
ボクの甘えであって、ボクの夢の中の話だから。

だからね、昨日、スグル君が出るって言ったとき、決心したんだ。  
ボクは、スグル君が迎えに来てくれるに値しない人間だから。  
せめて、ボクは自分がやったことをちゃんと責任をとろうと思うんだ。

だからスグル君、一人で出てね。  
なんだか、最後にスグル君を裏切る形になっちゃってごめんね。  
本当だったら、一緒に出たかった。  
一緒に町に出て、遊んでみたかった。  
ごめんね、本当にごめんね。

かなう事なら、もっと早くスグル君に会いたかった。  
でも、スグル君は生きて行けるから、大丈夫。  
こんなボクだけど、ずっと応援してるから。

だから、さようなら。  
ありがとう。

橘】

家の遠くでサイレンの音が聞こえた。  
あまり聞かない嫌な音。  
それはマンシヨンの近くで止まったようだった。

手紙を持つ僕の手が震えた。

意味が分からない。

彼のいつてることの意味がわからなかった。

でも心臓が無駄にばくばく言っていた。

何かがおかしい。

何か変な事が起きている。

心臓が僕の頭の中に警告音を鳴らしていた。

体が震えているのが解る。

僕は手紙を強く握りながら、家の玄関のドアを思いっきり開けた。  
寒い。

それは外だった。

まぎれも無く、外だった。

でも、感動も何もない。あるのは、無駄に焦る心と、まとりつく  
嫌な予感。

僕は外に思いっきりでて隣の家のドアを見る。  
改札には橋と書かれている。

心臓が高鳴った。

僕がノブに手をかけた時だった。

「おい！！」

急な声に僕は体の動きを止めた。

廊下の反対側には、僕を見つめる数人のスーツを着た慌ただしい男達。

急いで小走りに橘君の家の前に来る。

「君はどいてなさい！」

そう初老のスーツの男にいわれた僕は、彼に手をひかれていた。

残りの三人の男達は橘君の家のドアノブに手をやった。

まるで誰かを待っていたかの様にそれは躊躇無く開いた。

夕方、オレンジ色の寂しい光が差し込む居間でテレビにはモノミントが映っていた。

彼が司会のニュース番組だ。

「えー、今日衝撃的なニュースが入ったらしいね。」

画面はニュースアナウンサーに切り替わる。

アナウンサーは真剣な表情で話し始めた。

「今朝、都内の某マンションから女性の絞殺死体が、自宅の冷蔵庫から発見されました。」

犯人はなんと、女性の一人息子でした。」

画面はみたことのあるマンションに切り替わる。

前に慌ただしくいるメディアの人々。

テレビに映ったレポーターらしき男が言う。

「私は今、犯行現場となった一室のあるマンションの前にいます。

今朝、午前10時ごろ、警察に女性の息子である16歳の少年から

『母親を殺害した』という自首をする電話がありました。

警官がマンションに向かった所、室内から首を吊った状態の少年と、冷蔵庫の中から死亡推定時期から一ヶ月ほどたった状態の女性の遺体が発見されました。

自宅には遺書も用意され、少年は、自殺をしようとしていたと思われるています。

少年は、警官に保護され、現在は意識不明の重体で都内の病院にて治療を受けているとのことでした。

少年の意識が戻り次第動機等の説明を進めて行く、とのことでした。」

テレビ画面は、その後、スタジオに戻った。

モノ ミンタの難しい顔がうつる。

「え、冷蔵庫？

どうということなの？

一ヶ月前に殺したってことなの？

保管してたってこと？」

レポーターに画面が切り替わる。

「警察の発表によりますと、遺書によると、少年は、匂いがなどがもれないように、母親の遺体を冷蔵庫にしまったとかいてあったそうです。」

また、発見時、冷蔵庫は遺体がでてこないように、ガムテープで密着されていたとの事です。」

モノミンタは顔をしかめた。

「いやあ…、女性は死後一ヶ月もたっていたんでしょ？  
その少年っていうのは、死んだ後、一ヶ月も平気で遺体のある家において、普通の生活をしていたわけ？」

すると、またレポーターの顔が画面に映る。

「調べによると少年は、不登校でここ半年近く学校に言っていない事が判明しました。」

また、近隣の住人の話によると、その少年が家から出てくる所を見たこともないということです。

なので、ここ一ヶ月近く少年は母親の遺体のある家で生活していたと思われています。」

「ええ…、死体がある家にずっとこもってたの？  
何やってたわけ…？」

モノミンタは信じられないといったような顔をした。

「いやあ…、恐ろしい事件ですねえ…。  
なんでこういう事件が起きてしまうのか…。  
悲しい時代になりましたねえ。」

モニタは一瞬だけ小さい溜息をついたように見えた。

「では、次のニュースいきましょうか。」

部屋にはただ空しくテレビの音が響いていた。

## 21・さようなら

5年以上。

ボクは考えていた。

頭にあるのは後悔と呼べばいいんだろうか。

スグル君がボクに出ると言った最後の窓越しの会話の日。

ボクは頭が真っ白になった。

スグル君が出てしまう。

ボクを迎えに来てくれると言った。

でも、ボクが一緒に出れるわけがなかった。

昔は、よく夢に見ていた。

あの日、スグル君がボクの家に来て、一緒に出て遊ぶ夢。かなう事の無かったボクの夢。

どうしようもない物悲しさを感じる夢。

最近はどうすっきり見ないけれど。

ボクはどうすれば良かった？

あの夜ほど自分の罪に押しつぶされてしまいそうになったことはなかった。

自分が犯してしまった事の重さに、息苦しさに消えてしまいたくなかった。

一緒に出て遊びたかった。

自分がやってしまったこと全てが嘘だと思いたかった。

もしも全てが嘘で、ボクがただの不登校の少年なら、どれだけ人生は変わった事だろうか。  
少しでもタイミングが違ったなら、どれだけ違った結果が出ていただろうか。  
でもそんなことを思ってみても、何の効果もないけれど。  
もう事は全て起きてしまったのだから。  
起こしてしまったのだから。

ボクはあれから彼にあっていない。

会う資格もないような気がする。  
会ってもなんて言えばいいのかわからない。

でも、ボクは彼に感謝しているから。  
もういいんだ。

ボクはそんなことを思いながら窓の外に目をやった。  
5年間お世話になったこの施設を出て行くけれど、正直不安の方が  
大きいほどだった。

どうやって生きて行けばいいのか、わからなかった。

ボクは施設に入って来たときに預けていた荷物を手渡された。  
そして、ドアが開けられる。

その奥にあるのは、何だろう…。  
冷たい風がボクの頬を撫でた様な気がした。

僕は段ボールだらけのおんぼろアパートに仕事の後帰って来た。  
窓の外はもうすぐ朝。

日は昇ってないけれど、薄暗かった空が少しずつ明るくなって来ている。

夜勤は疲れるけど、僕は朝になるこの瞬間が少しだけ好きだった。

あれから5年ちょっとが経った。

僕は俗に言うフリーター。

今は昼間は某ファーストフード店で働いて、夜は、居酒屋の厨房で働いている。

たまに夜通しで働く。

いわゆる夜勤ってヤツだ。

お金もいいし、もともと不摂生だった僕に取ってはそこまで辛いもない。

楽な生活ではないけれど、やっと僕は望んでいた独り立ちが出来たのだ。

初めての一人暮らし。

まだ開封してない段ボールが部屋を占領している。

不安はもちろん沢山あった。

でも、その度に僕は思い出す。

昔の自分を。

そうすると、何故か大丈夫の様な気がするのだ。

少しは片付けないと…。

僕はそんな事を思いながら段ボールを一つ開けようとしたが、あまりの疲労に段ボールのことは忘れて、薄汚れた畳の上に座り込んだ。  
疲れたなあ…。

軽く溜息をつきながら、僕は壁にかけたカレンダーに目をやった。  
気にしないつもりでいたけど、胸が少しだけ高鳴った。

彼が収容されてから5年。

彼の父親があ的事件の後、僕に会いに来た。

僕のことを彼から聞き、お詫びをしに。

そのとき教えてくれた。

彼が出てくるであろう日にちを。

今日なのだ。

本当は気にかけるつもりもなかった。

正直言つて、辛かったから。

でも、無意識だろうか、意識的にやってしまったことだろうか、僕は、何故かこの日だけは何のシフトもいれなかった。

夜勤明けの今日はもう何も無い。

一日珍しく暇なのだ。

どうこうしようというわけではない。

ただ、仕事は入れたくなかった。

今日だけは。

……。

……。

僕はかろうじて横になれる狭い畳の上で目を覚ました。

どうやら眠っていたらしかった。

寒い中、うたた寝してしまつたせいか、喉が少しいたかった。

窓の外はすっかり明るかった。

でも、ほんの少しだけ日が傾いているのを見ると、随分と長い間眠っていたようだった。

僕は段ボールの上に出していた腕時計に目をやった。

…最悪。  
寝すぎた…。

僕はぼーっとする頭を抱えながら立ち上がった。

本当は今日一日を使って部屋を少しは片付けるつもりだったのに。

…片付けるか…。

僕は段ボールに手を添えた。

…。

……。

その手を止めて、僕は窓の外を無言で見つめた。

…。

……。

心が落ち着かなかった。

同じ考えが僕の頭に何度もまとわりついた。

僕は思わず顔をしかめた。

…。

恐らくもう既に出所したであろう彼が、どこにいるのかももうわからない。

ただ無性に、心がざわついた。

ざわついて、ざわついて。

そして気付けば、僕はコートを手の外に飛び出していた。

向かう所は一つ。

何がしたいわけでもない。

何か考えがあるわけでもない。

ただ行かなきゃいけないと思った。

電車に乗って僕は向かった。

僕の新居からそこは遠かった。

1時間半ぐらいかかって僕は着いた。

僕の昔のマンションに。

あの事件があつてから間もなくして僕の家族は引越していた。

だから、このマンションに近寄らなくなってから5年近く。

そんなマンションを前にして、なんとも言えない感情が僕を支配した。

懐かしい様な、怖い様な、悲しい様な、切ない様な。

僕は拳を握りしめて、マンションに入った。

見覚えのあるエレベーターに乗って5階へと向かう。

胸が無駄に高鳴っていた。

誰がいるわけでもないのに。

いてほしいなんて思ってしまう。

僕は廊下を歩きながら胸を抑えた。

この角を曲がれば…。

角を曲がる。

もちろん誰もいない。

僕は見慣れた玄関の前に来た。  
僕の家。

そして、橘君の家。

今は誰も住んでないようだった。

無駄に橘君の家のドアノブを握って回してみる。  
もちろん開くわけも無かった。

…。

…何やってんだろう、僕は…。

僕は自分の行為に思わず笑ってしまった。

自分は何を望んでいるというんだろう。

こんな遠くのマンションにまで足を運んで。

…馬鹿みたいだ…。

僕はそのままそこを去った。

エレベーターを下りて、マンションの庭のベンチに力なく座る。

辺りはもう暗くなり始めていた。

冬の夕方は暗くて寒い。

僕の顔を寂しい蛍光灯が照らしていた。

人通りのないその庭で、僕は泣いていた。

自分でも何故泣く必要があるのか全然わからなかった。

よくわからないけど、無性に悲しくて悲しくて、泣いていた。  
次から次に涙があふれた。

とめられなかった。

傍から見れば笑ってしまう図だろうと思う。  
大の大人が一人泣いている。  
暗い冬の寂しい夕方に。  
声を殺して泣いている。

滑稽だ。

とても滑稽。

僕は息を整えた。  
あまり泣きすぎて、顔はぐちゃぐちゃだった。  
まだ体も少し震えている。

僕は深呼吸をした。

何やってんだろ…。  
もう帰ろう…。

僕はベンチから立った。  
そしてマンションを見上げた。

……。

思わず拳を握りしめた。  
そしてただただ佇んで、静かにマンションを見つめた。  
帰ろうと思ったのに体は動かなかった。

…。

……。

…会いたい…。

ふとそんなことが頭をよぎった。

…会いたい…。

素直に僕はそう思った。

そう思ったらまた涙が出て来た。

情けないけど、意識しなくなかったけど、やっぱりひたすら会いたかった。

だって終わってないのだ。

僕にとって、まだ終わってないのだ。

あのレースは。

だってまだあの約束を果たしてないのだから。

彼を迎えに行って一緒に出て行くっていう約束を。

僕は終わったと思ってないのだから。

僕はまたマンションの方に歩みを進めていた。

帰りたくなかった。

帰ってしまえば、終わってしまうと思ったから。

静かに僕は歩を進めた。

今回は、マンションの箱庭へ。

箱庭についた僕は一階からその箱庭の上を見上げた。

見慣れた箱庭。

僕は5階にある自分の部屋のあの窓を見上げた。

一階から見上げているだけでは、ただ窓がある事しか確認出来なかった。

でも、僕は無性に懐かしさを感じた。

あの窓がああ頃の僕にとつての全てだった。

あの窓から見つめる景色が全てだった。

でも、今、僕はあの窓を外から見つめている。  
不思議な気分だった。

そして、隣にある橘君の部屋の窓を見上げた。

二つの窓。

傍から見れば何の変哲も無い窓。

でも、あそこでは、確かに行われていたんだ。

窓越しの奇妙な隣人同士の、奇妙な会話が。

そして、それは僕を変えてくれた。

僕は強さを貰って、希望を貰った。

僕は未来を開く事ができた。

僕は軽く深呼吸をした。

…帰ろう…。

僕には帰る場所があるのだから…。

そんなことを思ってから、僕はまたエレベーターにのった。

最後にまた、自分の住んでいた家の前にいこうと思った。

最後に別れが良かったのだ。

もう二度と来ないであろうあの家に。

僕は5階で降りた。

さつき通った廊下を通る。

そしてさつきも曲がった角をまがった。

「...」

僕は思わず歩みを止めた。

信じられなかった。

男が独り、僕と橘君の家の玄関の前に佇んでいた。  
寂しそうな男の横顔に電気が薄暗くあたっている。

心臓が高鳴った。

変わってはいたけれど見覚えのあるその表情に僕はすぐにわかった。

僕は何も言えずただただ佇んでいた。

心臓の音がバクバクと鳴って、何を言っているのかもわからなかった。  
突然すぎた。

出来すぎてた。

男は、悲しそうに溜息をつくとき、こっちに振り向いた。

そして目があう。

一瞬彼の目が見開いた。

そして、口は少しだけ開いたけど、何も音は出てこなかった。

時間が止まってしまったかのような気がした。

「…。」

僕は何も言えずに彼を見ていた。

でも彼は、視線をそらして申し訳なさそうに俯いた。

僕のほうに歩いて来て、ゆっくりと僕の横を通り抜ける。

「…ごめんなさい…。」

すれ違い際に彼はぼそつと呟いた。

初めて聞くその声に僕はその瞬間我に帰った。

振り返って思わず呼び止める。

「…橘君…!!」

僕の声に彼は歩みを止めた。

でも、彼は振り返らずに僕に背を向けたまま俯いて立っていた。

僕は彼の小さな背中を見ながら言った。

「…あの…、あの、僕は…、僕は今ね、やっと一人暮らしするようになったんだ…。」

あ、ちよつと不便で、…すっごい狭い所でおんぼろアパートなんだけど…。」

でも…、やっと、目標達成できたよ…。」

あ…、あの、今は、バイトして生きてるんだ…。」

僕の声は震えていた。

何を言っているのかわからない。

ただ、言わなくてはいけないことが多すぎた。

言いたい事が多すぎた。

僕は必死に続けた。

「あはは…、信じられないよね。

あんな風に引きこもってた僕が…。

ちゃんと自立して生きてってるよ…。

すごい辛い事もあったけど…、でも…、でもなんとかやってるよ…。  
すごいよね。」

橘君はゆっくり振り返った。

初めてちゃんと見る彼の顔。

大人になった彼の顔。

「橘君、僕…、僕がここまでこれたのは、本当に橘君のおかげなんだよ。」

僕は、橘君に救われたんだ…。

橘君は僕を救ってくれたんだよ…？」

「…。」

橘君はうろたえたように僕を見つめた。

「…だから、ずっと言おうと思ってたんだ。

…。

……ありがとうって…。」

橘君は、僕の話の聞きながらポロポロと泣きはじめた。  
僕はそんな橘君を見て呟いた。

「橘君、約束だったよね。」

出た日は、一緒に遊ぼうってさ。」

橘君はポロポロと泣きながら、頷いた。

「いこっか。」

僕がそう言つと、橘君は顔を上げて、何度も頷いた。  
陰りの無い静かな笑顔でポロポロと泣きながら。

僕と橘君は、「出る」事に成功したのだ。  
レースは終わった。

そして、窓越しの奇妙な関係も。

僕は橘君の隣を歩きながら、背後にそびえ立つマンションを振り返って心の中で呟いた。

さようなら

そして

ありがとう

## 21・さようなら（後書き）

今まで「窓」におつきあい頂きまして大変ありがとうございました。何も考えずに始めた物語だったので、目に余る点などが多い作品ではありましたが、なんとか無事に終える事が出来ました。

少しでも心に響くものがあってくれたら、とても嬉しく思います。本当に今までご愛読ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4578d/>

---

窓

2010年10月9日06時58分発行